

---

# 水晶物語

寿々

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水晶物語

### 【Zコード】

Z2329B

### 【作者名】

寿々

### 【あらすじ】

ごく普通の田舎町でごく普通の中学生生活を送っていた柊と麻貴。八神神社・別名「御稻荷神社」で不思議な少女「千代」と出会う。その時から一人の運命の歯車が狂いだした！？和風ファンタジー+シリアルス&コメディ小説！元「世界の闇よ、碎け散れ」です。

## プロローグ・彼女との出会い

星のない夜だつた。

その闇の中で何かが自分を呼ぶが聞こえる。

また、まだ。

幼女の声が、耳の中に・・・・・

ここはとある田舎町。

田園風景が広がる田舎町。

田のあぜ道を、二人の少年が歩いている。

一人は真っ黒な髪は肩まで伸ばしていて、歩くたびにその髪がはたはたと揺れる。

「ちょっと、学校行く前に八神神社によつてもいいか？」

黒髪の少年が自分よりちいさな少年に尋ねる。

「いいよ！ 神社によるのは柊くんの日課だもんね」  
ヒイラギ

柊と呼ばれた少年は笑つて駆け出した。

その後を、小さな少年が続く。

かるく苔なんかがはえた石段を、ひよいひよいと上がつて行く。

「待つてもいいぞ！ 麻貴！」

麻貴<sup>マキ</sup>と呼ばれた少年は、ボクもいくよ！ と

階段を駆け上がつた。

八神神社。

何処にでもありそうな、古ぼけた神社。

この神社は、平安時代の初期から作られているそうな。

取り壊そうとすると、狐が怒つて村人を喰い始めたらしい。

別名「御稻荷神社」。

「ね、柊くん。 どして毎日お祈りするの？」

賽銭箱の前で手を合わせている柊に、麻貴が問うた。

「じいちゃんが昔言つてたんだ。毎日お祈りしなきや狐が喰いに来るって」「

「信じてるの？ 柊くんらしくないよ」

「信じてるわけねーだろ！ やりたいからやつてんだよ  
再び神社に向き直り、手を合わせようとしたそのとき。

境内に、女の子がいた。

高価そうな着物を纏い、

どこか寂しそうな顔をした少女が

大きな丸い目で、こつちをじつと見ていた。

見た目からして5～6歳の幼女。

これ以上ないような黒髪をおかっぱに切り  
後ろは腰まで垂れている。

赤い大きな珠がついた簪カンザシを挿している。

「・・・・・ 柊くん。この神社、子供いたんだね」

「無視しろ、無視。ガキは関わると厄介だから」

「はーい」

二人は背を向けて神社を後に学校へ行こうとしていた。

「まで」

重く、強い声が二人の耳の中に響いた。

声の主はあの幼女。

「幻覚だよね？」

「この場合幻聴だ。だれか幻聴と言つてくれ」

柊はひくついた笑顔で、おそるおそる振り返った。

あの幼女はいない。

「ほら、幻だよ。まぼろし」

「そーだね」

「んなわけあるか」

向き直ると、異様に態度がでかい踏ん反り返った幼女が  
二人の目の前で浮いていた。

手をぶらりと下げ、顔を一人に近づけ  
真っ赤な目で一人を睨む。

「わーっ！！妖怪が出たー！狐の祟りだ！ゴメンなさい！明日から  
ちゃんとお祈りします！」

麻貴はすっかりテンパって、柊の後ろでぐるぐる回っている。  
柊もこれにはぐうの根もない。

顔を真っ青にして、一步も動けない。

その時、幼女がおかしなことを口にした。

「お主ら、わしが見えるんじゃな？」

これが、稻荷神の遣い魔、千代との出会い。

## 第一話・今日は最低最悪の厄日

5円の半ば。

青々とした緑の若葉は、一人の少年の上で揺れている。  
遠くからはきやつときやと騒ぐ子供の声。

牛の鳴く声、村人の声。

全てが嘘みたいに明るくて、優しい。

「・・・・・」

「ね、柊くん。今あの子なんて言ったの？」

八神神社別名「御稻荷神社」の境内で  
二人の少年が目を丸くして立っている。

「聞こえなかつたのか？わしは同じ説明を一度するのが嫌いじゃ。  
そこのお主、このちつこいのに言つてやれ」

その目の前には、高価そうな着物を纏つて、ふわふわ浮いている不思議な少女。

自分も「ちつこいの」のくせに偉そうな態度をとつていて。

「ち・・ちつこいのつて・・ボクは君より年上だよ！」

「わしは平安の時代から生きとんのじや！」

懐から扇子をとりだすと、また偉そうにそれで自分を扇いだ。  
実をいうとこの少女、この一人にしか見えないらしい。

「え・・・つと、麻貴、コイツ見えるな？」

「うん。見えるよ」

少女は一人のほうに向き直り、空中で胡坐をかいた。  
目は赤い瞳がらんらんと輝き、恐ろしくもある。

「じゃ、自己紹介から。わしの名は・・・・」

少女が自己紹介をしようとしたその時、柊が口を挟んだ。

少女はあからさまに嫌そうな顔をした。

「ちょっと待つて！普通ここで自己紹介！？」

だいたい君おかしいだろ！平安時代から生きてるとか！浮いてるとか！」

持っていた扇子で、少女はバーンと柊の頭を叩いた。ある意味ハリセンで叩かれるより痛い。もの凄く痛い。たまらなくなつて、柊は自分の頭を抱えてしゃがみこんだ。

「だから、今此処でそれを言おうとしているのに、お主が余計な口を挟むから

悪いのじゃ」

「だからってフツー扇子で思いつきり引つ叩くか・・・！？」

二人つて、会つたばつかなのに仲良しだな、と

麻貴は口には出さなかつたが思った。

口になんて出してみる。今その場で自分の命が絶えるぞ、と

麻貴はちょっとした恐怖感を覚えた。

「改まつて自己紹介をする。わしの名は『千代』。神々の遣い魔だ。そこちつこいの！名は！？」

扇子を麻貴の鼻の頭まで突き出して

千代は叫んだ。

「水野麻貴・・・です」

「フン。女みたいな名前しやがつて。で、そっちの馬鹿っぽいの。名は？」

最低最悪な言葉をはいて、麻貴同様、柊にも扇子を突きつけた。

「つて～・・・！あ？名前？柊！志摩富柊！」

「一回言えば分かるわ。クソガキ」

また千代は、柊を一発殴つた。

麻貴がおろおろして、柊に駆け寄る。

柊は今度は腹を押さえてぐあーと声を上げながらしゃがみこんだ。

「とにかく！俺たち学校行くから！お前の神様なんたらは放課後聞いてやるよー」

「じゃーねー！」

おかしな少女からなんとか逃げ出した二人は、学校を目指して一目散に駆け出した。

「ね、柊くん。あの子の話聞く気？」

「なわけねーだろ。子供の遊びだ。今日はとっとと帰つてマンガ読みたいんだ」

「浮いてたのは？子供の遊びであんな事出来るかな？」

「この頃のガキは何仕出かすかわからんねーの」

二人は舗装されていない砂利道を

砂埃を立てながら全速力で走った。

今の一人の頭の中には、「遅刻」の一文字しかなかつた。その頃、一人取り残された千代は、そのままふよふよ浮いて二人の後を見つめていた。

学校の時計の針は7：55を指していた。

「まにあつたーっ？」

「なんで疑問詞なんだよ。間に合ひてるよ」

「まにあつたー、じゃなくて提出プリントだしくんない？」  
ずざざざざざざつと後戻りをして、よく見ると、教室の前にみつあみでメガネをかけている女の子が仁王立ちしていた。

「・・・・おっす、相川・・」

「おはよ。咲ちゃん」

不機嫌そうな顔をしていた少女は、急ににっこりと笑つた。

そして、その場から動いたかと思うと、柊の腹に蹴りを食らわせた。ぐぎゃあああーと奇声を上げ、柊はかるく30メートルは吹っ飛んだ。

「毎度毎度遅刻しあつてボケどもが！」

その一言で、咲は右足を前に出した。

「おのれらのせいだ・・・・」

その右足を軸に、麻貴の方へ向き、麻貴と視線を合わせる。

「わたしや毎回毎回センノーに怒られとんのじやーーー！」

麻貴の胸倉を掴むと、反対側の廊下に麻貴を投げ飛ばした。いつたいその華奢な体の何処に、そんなパワーがあるのだろう。

麻貴も「ヘルパー」と叫びながらベしゃりと廊下に落ちた。

「毎度毎度凄いね。咲」

「これくらいトーゼンよ」

「咲に逆らつたら殺されちゃうね」

「当然。ひねり潰すわ」

クラスの女子と笑いながら、咲は教室に入ろうとした。その瞬間、視界に異様なものが映った。

赤い着物をきて、赤い眼をして、浮いている。

「・・・・・？」

「どーしたの？咲）。センセ来ちゃうよ」

「あ・・ああゴメン。なんでもないの」

幻覚だ、少し疲れてるんだ。

そうやって自分に言い聞かせ、咲は廊下にへばりつき苦しんでいる二人を無視して、教室に消えていった。

「今日は厄日だ・・・・・・・・・・・・」

「朝から一回も殴られちゃったね・・」

「たぶん二回だと思つ」

そのとおり、今日は一人の運命が変わってしまった厄日なのだ。



第一話・眞実はいつでも残酷

おもいつきり蹴り飛ばされた柊と  
おもいつきり投げ飛ばされた麻貴は  
二人同時に起き上がった。この場合、柊のほうが  
長く廊下にへばりついていた事になる。という事は  
柊のほうが長くみつともない姿をさらしていく訳である。  
「みつあみメガネって・・・、清楚可憐な文学少女だろ・・・？」  
「今の咲ちゃんじゃ似ても似つかないね。てゆーか反対だね  
」  
「ふふふと自分の制服をはたく。

黒い制服なのにどうやら田舎者ぽくなってしまった。外れたボタンをはめ直し、顔を上げたその先に

千代がいた。

「うわああああああああああああああ！」？

「うわせあああああああーー。」

「かの」「人を化け物扱いするなーーー！」また阿呆の人間からみたら化け物

なせか千代かした

浮しているし

サニハリ一イツは人體じやなし

クラスの何人かが一人を笑つた。

(・・・・そつが、こいつら見えないのか・・)

格は千代に「いいか絶対厄介事はおこすな」と

と念に念を押した。

「なんで来たんだよー」

昼休みの屋上。だれもいない。

かわりに此処は景色がいい。

「お前らが話の途中に駆け出すから追っかけてきたんじゃ  
「ねー、君ほんとなんなの〜?」

「だから! 稲荷神の遣い魔つて言つているだろ? がー。」

がつと口を開いて千代は叫んだ。

千代の迫力のあまりに、口から唾がとんだ。

見事、麻貴の目に直撃した。

「だから! その遣い魔! 遣い魔つて何! ?」

神様のお傍にいるのは天使じやないのか。

柊はなんとしても納得できない。

「そうか、お前らの脳味噌じや理解できんわな」

柊と麻貴にかるいショックを与えたところで

千代は自分の扇子を一人の目の前に差し出した。

それには、墨で書かれた文字と絵が、ぼんやりと浮かんでいた。

「世界には沢山の神々がいる。そのうちの一つが稻荷神じや。此処に出ているのは中心的な五大神じや。ほれ、此処見てみい。

ちやあんと載つとるじや。このお方じや」

狐の面を被り、肩でもたれた髪は、後ろで二つに束ねてある。天女に近い姿をしていた。

「で、稻荷神様のとなり。この方が水神様。こちらが炎神様。

それでこの方が荒神様。<sup>アラガミサマ</sup>あちらが光神様<sup>コウジンサマ</sup>」

水神様は、髪の長い冷たい表情の長身の男。蓬萊の玉の枝、という話に出てくる金・銀・瑠璃色の水を体に纏っている。

炎神様は、水神と対照的なバサバサとした髪で

赤い布の服を着ている。

荒神様は、顔が見えないフードコートみたいな着物を着ていて、口元がにたあつと笑つていて。

光神様は、菩薩様みたいな明るい笑顔の大男で、

お釈迦様が纏うよつたな着物で身を包んでいる。

「ほー、すげーなあ・・・・・」

「女の神様は稻荷神様だけなんだね」

麻貴が思わず呟いたとき、千代が目を輝かせてずいいっと近寄ってきた。

「そーなのだ！聞いて驚け！稻荷神様は今までずっと男ばかりだった五大神の中にはじめて女として入ったんだぞー！」

余談だが、千代の稻荷神様トークは優に一時間続いた。

「先生。柊くんと麻貴くんがいませーん」

こちらも余談だが、授業はとっくのとっくに始まっていたのだ。  
教室はざわざわとざわついている。

「あー静かに。学級委員。一人を探してきて

「（げつ・・・）はい、先生」

学級委員、という理由で教室から追い出されるように二人を探すはめになつた咲は、まつすぐ屋上にむかった。  
(あのクソども～～！！見つけたらぼっこぼこにしてやらあー)  
そんなおつかない事を考えながら、咲の足取りは確実に屋上に向かっていた。

そして、最後の階段を上りきつたとき。

「！？？」

朝見たあの少女が、二人と一緒にいた。  
何事もないかのように話している。

「あ・・ああ・・！」

「でもさ、俺たち、稻荷神と関係ないじゃん。もう解放してよ」

千代は目を剥いた。

「馬鹿いうな！お前たちは私が見えたという時点で  
神々の守護者なのだー！」

「

二人は絶句した。

そして、それを聞いていた咲も。

## 第三話・ロコノン女の過去話

屋上は静寂だつた。

驚きといつ、感情に包まれて。

「知らないからー俺絶対違うからー」

柊はめいいつぱい否定した。

なんだよ。稻荷神つて。

名前からしてふざけてるし。

だいたいこんな事があつていいはずが無い。

「ボクも違うよー。きっと間違いだよ」

麻貴は笑いながら、困ったような顔をした。

「あー、ちなみにあれ、咲とかいう女もそうじや」

その言葉は咲の耳にはつきり届き

手足を震えさせるほどだった。

「嘘でしょー！」

なによそれ。わけが分からぬ。

扉から、咲は無意識に飛び出してしまつっていた。

「え・・・いたの！？咲ちゃん」

麻貴の大声が、柊を遮る。

「悪いが嘘ではない

「・・・・。有り得ないわ。こんな、ダメな私が・・・」

頭がぐるぐる回つて、状況が読み取れない。

「咲ちゃん？咲ちゃんがダメってどういう事？」

頭もいいし、責任感もある。

運動だつてできるし、先生からも好かれてる。

そんな咲がダメなわけが無いのに。

「私・・・4月に転校してきたよね・・・」

雨が、降りそうだ。

毎日が、曇り空だった。

同級生は何でもできるのに、  
私は何もできなくて。

目立たない私は、たくさん嫌がらせを受けた。  
先生は私が居ないかのように扱つた。  
もう嫌だ。

今度の学校では失敗しないって  
わざと明るく振舞つて  
嫌われない程度の暴力も振るつた。  
そしたらあっけなくクラスの中心に立てて  
人間つてこんなもんなんだなあつて。

「ね。そこの、さつきの話は嘘じやないんでしょ？」

「まーな」

咲はぱああつと笑つた。

（なんかおかしくない？）

（それはきっと、咲ちゃんの過去話が入つたからでしょ）

「私！やるわ！」

「ええええ！？！？」

一人はあわせて悲鳴を上げた。

咲は笑顔で続ける。

「私を必要としてくれてるんだもん！やらなきゃ！」

「じゃ・・・じゃあ頑張つてね」

逃げようとした麻貴の襟首を掴み、

麻貴はぎやぴつと叫んだ。

「あんた達もやるの！こんな人生の中ではりえないような奇跡よ

！」

奇跡というか、人生ぶち壊しである。

「それに・・・それにこの子とつても可愛いもの！」

そう叫ぶと咲は千代を抱きしめた。

千代はヘルプメッセージを送っていたが、あえて見てみぬふり。

「おい。お前大丈夫？そんな奴が可愛いなんて。

しかも、こんなチビだぜ。あ！もしかしてお前口・・・」

言い終わる前に咲からアッパー切割を喰らった。

放物線を描き、柊は飛んだ。

「ロリコンじゃない！！」

「まだ誰もロリコンだなんて言つてねーだろ！..」

「だつて、この子『スロリ着せたら絶対似合つよ！..』

「それがロリコンつづーんだボケ女ーーー！」

よく分からぬまま、柊と麻貴は、咲のせいに千代の仲間になる事になつた。

## 第四話・八神神社の十代目

人生何もかもおしまいというのはこの事だらう。

『そーじゃ、柊。授業はどうした?』

千代の無責任な言葉で、三人ははつとわれに帰つた。  
咲が来てから優に15分は過ぎている。

『きやああああ！先生に怒られる！』

『おめーらの所為だからな！ドヂビとロリコンー。』

柊は千代と咲から蹴りを喰らつた。

『咲ちゃんは言い訳できてもボクらはむりだね』

麻貴の予感は大当たりし、

探しに言つた咲は「探すのに手間取つた」と大嘘をつけ  
柊と麻貴は仲良く説教を頂戴する羽目になつた。

「くつそー。あのアホ教師め。散々説教しやがつて  
帰る頃にはもう真っ暗で

田の端でカエルがげこげこ鳴いていた。

「だね。それにしても咲ちゃん。待つてくれてありがとうね」

麻貴が癒されるような笑顔で咲に笑いかけると

咲は顔を赤くした。

「べつ、別に・・・私の所為でもあるし・・・。

それに、千代だつているし・・・」

咲が顔を赤くして、言葉に困つてゐる頃

柊と千代はずんずんとあぜ道を歩いていた。  
向かっているのは、八神神社の本殿。

「此処から、わしを見る視線が感じ取れた。

守護者はぜえつたい此処にいる！」

と千代が言い張るもんだから

柊は仕方なく行く羽目になつたのだ。

此処は、あまり来たくなかったのだが……。

本殿は神社の裏側に大きく聳えている。

「ここら一帯じや、この神社の本殿が一番大きいだろ？  
「視線からして歳は14～5歳。

大人びているようじやがな」

柊は益々嫌な気分になつた。

此処の本殿に、いい思い出は無い。

全くといつていいほど、無い。

だから入るのが嫌だつたのだ。

「すいませえーん。誰かいらっしゃいませんかー」

あいつだけは出てくるな。絶対に出てくるな。

出てきたら神社に飾つてる狐壠すぞ。

「はーい」

げ。

柊の願いは叶わなかつた。

奥から、髪の長い少年が着物をきて現れた。

「ん？」

少年は目を細めて柊を睨んだ。

「お前、柊か？」

「・・・そーだよ」

少年はにやつと笑つた。

だから「イツは嫌なんだ。

「相も変わらずのアホヅラだな」

柊はムカツときたが抑えた。

千代が平然と少年を見つめる。

「しつかし久しぶりだな。お前が此処に来るのは。

あの時境内に祭つてある觀音像の頭を落としたとき以来か？」

柊は完全にぶちぎれた。

「つるせええええー！俺だって来たくてきてんじゃねえええー！」

ああ、ムカつく！

だから会いたくなかったんだ。

八神神社十代目後継、  
八神首魁ヤガミオンカイ！

## 第五話・守護者の使命

カタン。

3人の目の前に湯気の立つ茶が置かれた。

「お前は・・麻貴か？久しぶりだな。全然変わつてないな」

「そーお？音魁くんもだよー」

二人はけたけた笑つた。

くそぅ。音魁のやつめ。

麻貴には嫌がらせなんかしないのに。

つーかおかしすぎるだろ。名前。

「おめーに言われたかねーよ。柊」

ちつ。聞こえてやがつた。

かたかたかたかた貧乏揺すりをする柊を横目で見ながら  
千代はため息をついた。

「ところで麻貴。お前の隣の女の子。こんな子いたか？」

「あーこの子はね！転校生の咲ちゃんって言ってね・・・」

柊はなんとも面白くない気分だった。

（おい。千代ー。さつさと用件済まそうぜー。

俺此処の空氣吸うのヤなんだよ）

（空氣なんて何処で吸つても同じじやろーが。ボケ）

千代はあまりに柊がしつこいものだから  
仕方なく本題に入ることにした。

「おい。その。そこの髪の長い巫女っぽい格好してる童」

「あ？俺のこと？」

「そう。お前の事。この馬鹿が五月蠅いから率直に言つや。お前は神の守護者だ」

「お前は神の守護者だ」

周りの空気が一気に重くなつた。

音魁はめを丸くして呆けた。

「柊・・お前まだカードゲームみたいなやつしてんのか。

成長しねー奴だな」

「んなわけねーだろーがーーだいたいこの年でカードゲームするよ  
うな

お子様に見えるのか俺はあああーーー！」

説明はずいぶんと長かつたので以下略で済ませてしまひ。

「ふーん。なるほど。よく分からんが、わかつた  
どうちだよ。

「じゃ、よろしく頼むぞ。守護者」

それでいいのかよ。

柊は気が遠くなりそうだった。

まさかこんな奴との因縁がこんな形で戻つてくるとは。  
昔、柊と音魁と麻貴は親友以上の友達だった。  
小学校も一緒だったし、いつも三人で遊んでいた。  
それが、いきなり中学校に進級してから

「家の都合」

と義務教育中なのに学校に来なくなつたし

二人とも遊ばなくなつた。

麻貴は最初は辛かった。

気にしてないよ、と強がつて影で泣きそうな顔をしていた。  
柊は辛くもなかつた。

でも、音魁の後姿を見ているうちに

自分がとってもとっても小さな存在のようすで

先進んでいく音魁を見るのが

自分にプレッシャーを重ねているようで

だから会いたくなかったんだ。

なのに毎日神社に来てしまう。

未練？それは違うと思つ。

神社に来たら三人の頃を思い出すのに

それを必死に忘れようとして

毎日祈る振りをした。

今よくよく考えれば完全に矛盾してゐる話だ。

「なあ」

音魁の声で我に返る。

咲が不思議そうな顔をして柊を覗き込む。

「守護者つつーのはいいけどさ。何するの。何処で、誰が、何を？」  
確かに。こんな肝心なことを知らないで俺たちは了承したのか。

「あ、それか、それはな・・・・・

わしもよく知らんから、一度天界に来てもらひたいとする

一同が、マンガみたいにずつこけた。

## 第六話・博打好きの美女神様

「じゃあ、いざ天界へれつづ」——！」

おいおい、なんか平仮名になってるぞ。

千代の提案（？）で柊達は天界というわけの分からぬ場所へ連れて行かれる羽目になった。

「……腹減つてんのに……」

そう考えれば夕食を食べてないし

家にも帰つてない。

給食は完全に消化されて

胃の中はからっぽだ。

「あー、そうじや。一人一人の家に『泊まるから』みたいな電話入れといったからな」

なんつー勝手な奴だ。

でも柊が反論できるような空氣じやなかつた。

クエスチョン・なぜ？

アンサー・みんな「さあいざ天界へれつづ」——。何としても俺らは行くぜいやつほう！

みたいな空氣だつたから。

柊の頭が痛くなつた頃。

空間が、歪んだ。

「きや——！」

足元に穴があいて、五人は一斉に落ちていく。

「おい！千代！何てめーだけ浮いてんだよ！ずりーぞ！」

「これがわしの力じやからな」

「助けて助けてヘルプヘルプ！嫌いだけビピーマン食べるよ！多分

!

「わやあああああああー！」

「かよ」

「ふつー天界つて上じゃねーのおおーー? ?」

「もつともである。音魁。

しかし一向は下へ真っ逆さまに落ちていった。

ストン。

それはあまりにあつけない音だった。  
空間に音が飲み込まれるように響いた。  
軽い不協和音かもしけない。

「わ—綺麗！」

一面が水に囲まれたよ<sup>う</sup>な二<sup>二</sup>二<sup>二</sup>した神秘的な空間は  
竹林と砂利道が素敵に飾られてある。

異空間つてやつかな？

「此處は天界への道「天路」じゃ  
千代が先立つて歩き（飛び）だしたので  
一同は千代の後を追つた。

一時間後

「おこー！こつまど！」うしおあるもやあこいんだー！  
もう城は田の前じやねーかあ！」

かれこれ小一時間。

四人（五人？）は歩いている。

城は目の前なのに。

「つるつさいやつじやの一。仕方が無い。行くかの」  
半ば呆れ顔の千代は、懷から石を取り出した。

マリンブルーの水晶玉。

そして、叫んだ。

「蒼く輝く漣よ！今風を我が身に宛がい風魔を呼び寄せろー！」

「漣」とは水晶の名前らしい。

風が皆の体に巻きつき、空に飛びあげた。

地面から足が離れる恐ろしさに、麻貴は少しそくんだ。

「飛べ！」

千代の言葉が引き金で、風は城に向かって飛んだ。  
毎分100kmはあるんじゃないだろうか。

あーっと言う間に城門が目の前だつた。  
気づけば千代も居る。

「千代。あなた一体・・・」

咲が問い合わせようとしたとき、また体が浮いた。

「左の神所へ！」

風は千代の命令に答え

左へ曲がり、御殿の前で皆をおろした。

「！」苦労じゃった

『これくらい大丈夫ですわよ。んふふ。バアーリ、子猫ちゃん』

風が喋つた。そして消えた。

千代がかなり嫌そうな顔をした。

「し・・・喋つた」

「す」

御殿の中は、高価そうな絨毯が床を見せないよう敷き詰められて

いた。

土足で歩いている柊たちが愚民に見える。

「稻荷神様ー」

千代がベットに呼びかける。

おいおい、神様つてベットに寝るのか？

「どんな人かなつ」

「そりや、千代が見せてくれたあの扇子にあつた感じの・・・  
「そんなのあつたのか！？俺みてねーぞ！」

音魁の言葉に、柊はちよつと勝ち誇つた気分になつた。  
「えーっと・・千代？お帰りー。案外早かつたね～」

「そうですか？あ！凛様リン、またお酒飲まれましたね？」

「あ～ばれちゃつたら～。えへへ」

四人が硬直した。

神様つて酒飲むんだ・・・・・

「守護者見つけましたよ」

「ありがつと」

稻荷神もとい凛は細く白い足をベットから出して  
床に着地した。

狐の面は被つてない。

冷たげで、きりつとした目。

紅く膨らんでいる唇。

美女だつた。

「いらっしゃい。守護者。あたしが稻荷神こと凛よ。

趣味は博打。どーぞヨロシクね。」

神様へのイメージが、音を立てて崩れたのが分かつた。  
神様つて、博打するんだ・・・・・



## 第七話・咲の能力

「御殿の中は静かだった。  
凛と千代以外は。

「凛様ー！また仕事サボつてましたねー！？書類が溜まってるー！」  
千代の手の中には、溢れ出しそうなほどの書類が積まれていた。  
ちなみに神様の仕事は、人間を見ることらしい。

何の意味があるのかよく分からないが。

「ちょっとくらいイイじやなあーい。しかも博打で儲けたのよ！  
ほら見てよ。凄いでしょっ。えへへ」

こちらも溢れ出しそうなほどどの札束が、凛の手の中にあった。  
子供みたいな無邪気な笑顔で笑う。

「そうですね～すごいですね～。でもまずは仕事でしょ～？」  
「はい・・・。そうですね・・・」

おそるべし。千代。

凛は渋々デスクワークを始めようとした。

「あ！この者たちに力を与えるのが先です！」  
千代が思い出したように叫んだ。

俺たちはその程度の存在か？

帰るぞ、口ラ。

「え？そーなの？メンドクサイなー。あれ結構労力かかる・・・」  
「つべこべ言わずにやれ」

「はい・・・」

おい、仮にも神様じやないのか？  
上司じやないのか？

それによくクビにならないもんだ。

「じゃ、凛ちゃんいつきまーす

精神年齢も子供か。

見た目はいいかんじのお姉さんなのに。

「じゃあまず女の子から！」

そう言って、咲を指差した。

反動で、狐の尻尾みたいな髪が揺れた。

「名前は？」

「咲・・・です」

「可愛い名前ねっ。じゃ、そのみつあみを解いて」

なんか訳の分からない事を言い出した。

「みつあみ解いてなんの意味があるんだよ」

亥いた格に、千代の蹴りが直撃した。

ぎやあああと叫ぶ柊。

「なな何しやがる！」

「今の発言は凛様への侮辱だ！私が許さん！」

「オメーに言われたかねーんだよ！」

ぎやあぎやあと叫ぶ二人をよそに  
リョクジュノギシキ  
力授之儀式は進められた。

「あの・・・どうしても髪とらなきやダメですか？」

私、髪の事でいじめられた事あって・・・だから

「つべこべ言わずに取りなさいよ」

さすが。この部下あつての上司だ。

咲は仕方なく、髪を解いた。

みつあみが消えて、ふわふわとカーブを描いた髪が、咲の腰のあたりで

揺れる。

「綺麗じやん。な、麻貴」

「うん！とっても素敵だよ！咲ちゃんつ

咲は驚いていたが、嬉しそうな笑顔を見せた。

「じゃ、いくぞ」

凛は咲の髪を掴んだ。

そしてその髪にかるくキスをする。

「！？」

すると、髪が青白く光を放ち、下から空気圧がふわっと押し寄せた。

「ひやあ！」

光と風は、消えた。

咲はぽかんと口を開けたままだ。

「はーい完成！おめでとう。咲！」

何が完成なのかよく分からぬまま

咲はお礼として頭を下げた。

「ああ、そうだ。そのままで『神の祖先』って叫んでみな

神の祖先？

神と髪を合わせたギャグか？と

柊はしらけた。

予想は外れた。ギャグなんかじゃなかつた。

「神の祖先！」

ごあつと音を立てて、咲の髪が揺れると  
髪がいろんな箇所で一纏まりになり、  
床に穴を開けるような勢いで刺しこんだ。

その風圧で、書類や布団が宙を舞つた。  
窓に飾つてある飾り物も、りんりんと音を立ててぐるぐると回る。  
やがて、風は止んだ。

「さ・・咲ちゃんす」おい・・・

「これが、咲の能力。髪の祖先じや  
おい、字違うぞ。

神の祖先だろ。

こうして、咲は攻撃能力を手に入れた。

## 第八話・マンガでもありえない！？

「は～い。次の方～」

「ここは病院か？」

「凛様。次はコイツです」

そういうと、千代は麻貴を蹴った。

わあつと叫んで、麻貴が前へつんのめる。

「痛い・・・酷いなあ」

ぶつぶつ文句をいう麻貴をよそに

千代はふよふよ飛んで、書類を片付けに行つた。

「はい、君、お名前は？」

完全に病院になっちゃつたよ。

「ま・・麻貴です」

「麻貴、ね。麻貴、これ持つてみなさい」

ちやらつと音をたてて麻貴の目の前に現れたのは  
龍が彫られている長いチェーンだつた。

いがいとセンスがいい。

「それ、あたしの力込めといたから。「チェーンリング」って  
叫びながら手を前に振つてみ？」

こくりと頷くと、そのまま千代めがけて麻貴は手を振つた。

「チエーンリングう！」

声が響いたとたん、彫り物の龍が目を紅く光らせ  
がばつと口を開けて千代に突進した。

これには終も音魁も驚いた。

「わわわわ～！」

慌てて千代がよける。

あたればいいのに、と終はけよつと思つた。

「なにをするー！」の童・

「ゴメン・・・」

「どうやら近づく気は無かったようだ。

麻貴が攻撃をする気が無くなると、龍も元に戻った。

「忠誠心あるのよ。これ。

もう少ししたら、喋ってくれるかもね

ふわあと、凛はあぐびをした。

かなりだらしない。

「今日はもう疲れちゃったからおっしゃまーいー。

こう事で、俺らは明日へ後回しにされた。

腐れ神め。

来たときは明るかつた天界も  
夕日が落ちて、真っ暗になつた。

「お腹すいたー。」「はんー」「はんー」

どこぞの子供か。おのれは。

凛があまりにも夕食を急ぎ立てるものだから  
千代は凛をひと睨みした。

「あ、そだ。みんな呼んじゃおつと」

おもむろに、凛は部屋にあつた電話つぽいものに手をかけた。

「あの、これ電話ですか？」

咲があそぶあそぶ聞く。

「そーよ。受話器は下界と同じ。でもこの電話は魔法で作ったの  
「すうーい。凛様すうーこ」

わあっと歓声を上げる麻貴。

凛は照れ笑いした。

「ありがと。あと、凛様じやなくて凛でいいからね  
部屋が騒がしくなつた。

凛はがちやがちやと電話をかけまくるし、

咲と麻貴はその傍らで電話を見守つている。

「電話が面白いのか？あいつら。ガキだな」

「なわけねーだろ。まあ、ガキだけどな」

はあつと溜息をはいたのは終と、音魁。この一人、似たもの同士である。

「おじや ましまーす

「こんばんわつ。凛様！」

なんか声が増えたぞ。

おかしくないか。

「相変わらずだな・・・」

「おっす！ 凜！」

次から次へとわらわら声が増えていく。

おいおいおい、なんか人数も増えたぞ。

「お・・おい、千代。あれ・・・」

「ああ、あれは他の五大神の方々じや

・・・・・・・・

なんやかんやで、四人は、しょっぱながら五大神と鉢合せになつた。  
つーか、マンガでもありえねーだろ、こんな事。

## 第九話・何かが足りない

五大神

正式名を、五大八百万之氏神

ゴダイヤオヨロズノウジガミ

はつきり言つて、めっちゃくっちゃな名前。

どやどやと音がして、たくさんの人間（？）が部屋に入つてくる。

「凛！おまえの守護者見つかったのか！」

よかつたなあ！」

千代が見せてくれた絵では、確か炎神だつたような人が、凛に笑いかける。

「おかげさまで。この子達、技覚えるのも早くて助かるわあつ」

完全にババア化している。

柊が呆れたような目で見ると、凛の横にいた千代がぎろりと睨んできた。

この矛盾女！

「そーだ！みんなこの子達に自己紹介してあげてつぱんつと手を叩き、凛が飛び跳ねる。

よく見れば、神様達の隣に、一人ひとり護衛つぽいのがいる。

「千代、あの神様達の隣に居るのはなんだ？」

柊が聞くより早く、音魁が千代に呼びかけた。

みんなそれそれで、男も居れば女もいる。

幼女っぽい体型の人は一人も居ない。

「あ、あれは・・・まあわしと凛様みたいな上下関係の事じやお前みたいな上下関係成立しねーよ。

「おい小僧ども」

「「どうわああああ！？」」

突然の声に柊と音魁が同時に叫ぶ。

咲と麻貴は、まだ電話に夢中だ。  
ガキどもめ。

柊たちの田の前には、黒髪長髪、上半身が裸で  
下半身にジーンズに近い素材のズボンを履いている  
水を体に纏つた男がいた。

「俺は水神の庵。<sup>アン</sup>こっちが秦<sup>シン</sup>」

庵は、隣に居たサラサラヘアーの少年を指差す。

慌ててペコりと、秦は頭を垂れた。

「あ・・・どうも・・・えっと、俺が柊で

こっちのすかしたロン毛が音魁<sup>オンケイ</sup>」  
ぽかつと、音魁が柊の頭を殴る。

（つてーなあ！なにすんだよ！）

（誰がすかしたキモロン毛だ！）

（そこまで言つてねーだろ！）

「お前らには、何かが足りない……」

「え？」

一瞬、言葉が聞き取れなかつた。

なんて言つたの？

しかし、庵はくるりと向きを変え  
部屋から出て行こうとした。

「えー。庵帰っちゃうのぉ？もつちゅつといつてよう」

「つむれー。こんな酒臭い部屋に一小時間もいられるか」

庵はそう吐き捨てるど、秦を従えて  
部屋から出て行つてしまつた。

「ふーんだ！お前なんか猥褻物陳列罪で訴えられてしまつべら  
ぼーめ！」

凛様は意外と暴言はきである。

てゆうか、庵の最後の言葉は何だつたんだろう……？



## 第十話・物好きな炎神様

凛が庵にむかって散々わいめいた後、やつと自己紹介が始まった。

そのころには凛は完全に酔いつぶれてばたんきゅー、と倒れたかと思つと

「氣持悪いい」と叫んで

廁に逃げ込んでしまった。

「じゃ、仕方ないので自己紹介でもしてやってください」  
めつちや偉そうな態度で、千代が眞に言つた。

「はいはい。俺からやるよ」

赤髪の男が立ち上がつた。

隣にいた少女が一緒に立ち上がる。

少女のような人はみんな、肩が出ている薄い服と肩と手を除いた腕をかくす布をはめ、手には手甲をつけている。

ズボンらしきもので下半身を覆い、

足の指が出ているサンダルっぽい靴を履いている。

ちなみに、秦もそうだった。

「俺は炎神の湾。ワシこつちが蘭」

にかつと、湾は笑つた、フレンドリーである。

「俺は蘭だ。よろしく」

「よろしく。女の子が俺だなんて、珍しいねつ」

麻貴がにこつと笑つて手を差し伸べた。

その瞬間、蘭は麻貴の手をばしつとはたいた。

「！？」

「俺は男だ！女じゃない！」

いやいや、どう見ても女じやん！

ポーテルだし、目はくりつとしてて完全に女だし。

「どう考えたつて女だろ……？」

柊が呟くと蘭は泣きそうな顔になつて、うつむいた。  
その瞬間。

「う・・・う・・・うわあああああああーーん！」

大声を上げて、蘭はびえびえと泣き出した。

顔に手を当てて、目を擦つているところを見ると  
やつぱ女だ。

「ふええええーっ。お・・・俺は、男だもん！」  
この期に及んでまだ言つか。

「はいはい、泣くな泣くな」

ぽんぽんと、優しく湾が蘭の頭を撫でる。

ひえつくひえつくとしゃくり上げながら、蘭は頷く。

「許してやつてくれな。こいつ、性同一障害つてやつなんだ」

四人の耳元で、小声で呟く。

性同一障害とは、

体は男なのに心は女

体は女なのに心は男

みたいなやつだ。多分。

「でも、炎神様も物好きだな。こんなめんどげなやつを・・ほげが

音魁が失礼な事を悪気なく言い出したので

柊が音魁を拳で殴つた。

こいつ、見た目と違つてすつじく失礼な奴である。

しかし、湾はははつと笑つた。

「ひついう奴のほづが面白いじゃんか」

抜けてるんだが、天然なんだか、ちゃんと考えてるんだが・・・

## 第十一話・さらわれた姫君

蘭がまだ啜り泣いている時に部屋に、一人女が入ってきた。

まさかコイツも性同一障害とかいうんじゃないだろうな・・

「荒神様の代理。蔭<sup>イン</sup>でございます」

無駄に長い髪をひらりと靡かせ

真紅の眼を、柊たちへ向けた。

「斬<sup>サン</sup>様は気乗りしないという事で

こちらに参られませんでした」

こつこつと足を戸を響かせ、柊たちの方へ向かう。

「柊」

そう呟いて、柊を指差した。

「音魁」

また同じよう

「麻貴、咲」

それぞれを指差した。

「合っていますか?」

こくこくと、咲が頷く。

「では・・私はこれで」

ひゅうっと風の音がしたかと思つと、

蔭は其処からいなくなつていた。

千代は出て行こうとする蔭をひき止めるため廊下で、蔭の前に立ちふさがった。

「どうか、目の前に浮いた。

「どうしたの?千代」

「どうかおかしいぞ。蔭。王の姫君様、いらっしゃるか?」

そう問うと、蔭は悲しそうに眼を伏せた。

瞳には、涙が滲み、潤んでいる。

「なにがあつた？言うてみい

「姫様は・・・・・・・・・・・・」

長い廊下からは、声一つ聞こえなくなつた。

「じゃー、最後は俺だな」

お釈迦様の格好をした大男が立ち上がる。

## 傍にいた少年も一緒に

「俺はお祖の湯にこだわるからね。」  
「ハシバニ。」

愛嬌のある顔が、二二二つと

麻貴がにこ一つと笑い返すと

照れ隠しなのか、その白い髪をちょっと引っ張つた。

「みんなで和んでんのよおおお！」

その地を離れ、娘が声がした

「」。・。稟。大丈夫か

湾が話しかける。蘭が、いよいよ代わりに、凛を

支えようとした。

大丈夫な分けなしでしょ」「！きめた！せう一切お酒は飲まない

卷之二十一

心の声が聞こえたのか、稟は終を、甘口りと睨んで

酒瓶を投げつけてきた。

「わ！」

卷之二

「人やあ！」

「きいーつ!! ムカツクうわー!! 当たんないー!!

がつしゃーんと音を立てて酒瓶が壊れる。

間一髪で、四人は其処から逃げ出した。はは・・と湾が苦笑いをする。

「あー・・ああなるともう手がつけられないんだった。

じゃ、俺帰るから！後はがんばれよ！終とその仲間達！」

ネーミングセンス悪！！

つーかこの状況で助けないってどーよー？

おい！とかなんとか言ってる間に満も逃げちゃったし！？

どーすんの！？子供助けるよ！

「きーっ！イライラす・・・『凛様！』

ばたんと、千代が部屋に飛び込んできた。

そのおかげで凛の一方的な攻撃は止んだ。

ナイス！千代！

と、その場にいたみんなが思つただろう。

「凛様・・・！姫君が・・小夜様が浚われたって、どつ脣づ事ですか！？」

姫君？

姫君つて、プリンセスの事？

「しかも、冥堂ミツウドウに浚われただなんて・・」

おーい、俺たち置いて話しつづけてください。つーか、めっちゃやっぱそいつな話んですけどー？

## 第十一話・一人目の姫君

今まで赤かつた凛の顔が、突然青ざめた。

「どうしてそれをつ・・・・？」

「今さつき蔭から聞きましたつ！なんでもつと早く・・・」

柊は苦しくなつた。

肉体的にじやないよ、精神的に。

そして、やりきれなくなつて、叫んだ。

「あああー！もーっ！だいたい姫様つてなんだよ！？

俺らも守護者だろ！？それくらい教えろよ！」

凛と千代は二人顔を見合わせて、そしてから向き直つた。

「ふん。童が。大層な口を利きあつて

「・・・いいわ。全部話すから」

手元にあつたマッチに火をつけ、行燈に灯す。  
煌びやかな部屋に、不釣りあいな質素な行燈。  
揺ら揺らると、炎が揺らめいた。

「破邪」

一言呴き、凛は行燈に手を掲げる。

田は落ちた。

月が、あがつてきて、ちょうど真上からそれた頃。

「庵様。来ています。中体が六つ。残りは魑魅魍魎です」

それまで規則正しい寝息を立てていた庵が

「わかつてゐる」

と言い放ち、ベットから下りた。

秦が、がらがらと音を立て窓を開ける。

月明かりに照らされて、何かが見える。

それは、まじうことなき、妖だった。

「フン」

庵は鼻で笑うと、手を空に掲げた。

「オア」

『わかつていますよ。主』

その手を、もつと先へ突き出す。

「そう、全では無にかえる運命。

水に溶けて消え去れ。醜い妖どもよ」

ふつと呟くと、庵の体に巻きついていた水が

庵の手を伝い、空へと放たれた。

もの凄い速さで飛んでいき

妖どもを無に帰した。

「処罰」

隣にいた秦が叫ぶ。

手甲から、花びらが舞い、それはやがて消えた。

「終わりました」

「せつかくの安眠を邪魔しやがって。

俺は寝る。今度起こしてみる。お前を真っ二つにしてやる」

「そういうのは妖に言ってください」

天界には、その上に王家オワヤというものがあつて  
我々神々は、それを守るために作られた組織。

人間を觀る、というのは仮の姿で

本当は、王家のためだけに存在するのだ。

「なのに、わしらは・・・それを守りきれなかつた。

わしが、下界へ行く前から気づいておれば・・！」

自暴自棄になつている千代を、凛は

そつと抱きしめる。

「あなたの所為じゃないわ。あなたは自分を責めすぎ。

疲れているのよ。おやすみなさいな」

「くん、と小さく頷くと、

千代はおとなしくベッドに向かった。

咲が、ふらふらと歩く千代を見つめる。

「ねえ、凛。気になつていたのだけれど」

目線を逸らさずに、咲が問う。

肯定するかのように、麻貴が頷く。

「みんな、名前の最後に『ん』がついていたでしょ。  
でも、千代だけは付いていないわ。何故なの？」

凛は、キセルを口にくわえ、

マッチで火をつけたまま、応えた。

「あたし達は五大神になつた後、名をそれぞれ貰うのよ」  
ふーっと、キセルから吸い込んだ煙を吐き出す。

それは行燈の周りを囲み、やがて消え去つた。

「でも、王家の者は、一度貰つた名を変えてはいけない」

音魁が、はつとした顔で、凛を見る。

「じゃあまさか・・・・・

「そう

千代は王家の姫様なの。

しかも、一番高い値をもつてゐるわ」

## 第十二話・始まり

凛は、また煙を吸い込み、吐き出した。

「王家には、二人子供がいたの。それが千代と小夜様。でも、主の考へでは、子供が二人生まれるのはいけないって思い込んでて

後に生まれた千代を、あたしたちに預けたの」  
現に、王家に子供が一人生まれることは天変地異が起こるくらい珍しいことらしい。

それでは、千代は六歳の頃のまま、体が全く成長しないのだ。

「あ、これ千代には内緒よつ！ 王家の人は達がおしえないでえーつて泣いて頼んで来るんだもんつ。おもしろかつたあ」  
けたけたと凛は笑った。

性格最悪だよ。この女。

その時、他の部屋から、地響きがした。

「わつ！？」  
「きやあつ！」

咲が耳を押さえて、辺りを見回す。

「ああ、アレは妖魔よ。戦つてんのは・・庵かな？  
あいつ寝起きとおつても悪いからねえ」  
地響きは、はつと止んだ。

その瞬間、麻貴が窓を開けて、周囲を確認する。  
柊も麻貴の後ろから窓の外を覗き込む。  
花びらが舞つていたのと、

水が妖を包んでいた。

「水・・・？」

「水？ やつぱ庵かあ！」

ぽん、と叩いてキセルの中に詰まっていた灰を落とした。  
そして、だらしないあぐびを一つした。

「じゃーあたし寝るからー。柊と音魁の力授之儀式は明日

早めにするから」「う

ぱりぱりと首筋をかきながら

一括りに結っている髪を外しながら凜は言った。

「おい！俺ら何処で寝るんだよーっ！」

「……ソファーで良いじゃん。ソファーで」「

「来客に対してもその態度はおかしいだろ！」

「なによ。文句あるつての？じゃあ床で寝なさいよー床！

それが嫌なら……ぐう……」

ぶちん、と柊がされた。

「途中で寝てんじゃねえ————！」

結局、四人は四つあつたソファで、寝ることになった。  
ちなみに、寝相の悪い柊は何度か落ちた。

ちゅん。ちゅん。

スズメが鳴いている。

ああ、朝か。

学校行かなきや。

あれ？なんで俺制服のまま寝てんの？

風呂は？風呂に入った記憶がない。

めし・・はなんか豪華だったよつな・・・

ん？なんか聞こえるぞ。

起きろって？無理無理。こんな眠いのに。

あ、でも学校行かなきや。

今日は体育でマラソンがあつたよーな・・

「起きろおーーーー柊いいーつーーー！」

びんびんと耳に響く声が、朝の静けさを裂いた。  
その犯人は、咲だった。

「あ・・相川？なんていんの？俺ん家だぜ？  
ありや、俺ん家こんなに広かつたつけ？」  
はあーと、咲がため息をつく。

隣で音魁が笑うのをこらえている。

そのまた隣で、麻貴が「おっはよーっ」と言っている。

「昨日のこと、覚えてないの？」

ぼけーっと頭を回すと、やつと思に出した。

そつか。ここは天界だ！

「つーか相川。お前変わった服きてんな」

咲ははつと顔を赤らめ、両腕を体の前に持つてきた。

昨日着ていた制服はいづこく。

上半身の服は秦や蔭が来ていたのと同じ。

下半身は短いズボンを履いていた。

膝はもちろんのこと、太股も半分くらい出ている。

「ひつ・・・蘭ちゃんに作つてもらつたの！」

これをか？この洋服をか？

あいつやつぱ女じやねーか。

「はやく起きてよ柊くんっ！柊くんも着替えたほうが良いよっ！」

にこやかに笑いながら、麻貴が机の上を示す。

そこには、キチンと折りたたまれた服が

「柊用」と書いた透明の袋に入れられていた。

「お前と俺は今日力をもらうんだ。

はやく着替えとけよ」

くすくす笑いながら、音魁がソファにもたれかける。

かーっ！やつぱムカつくっつ！！

上半身を起こすと、鏡台の前に

口に髪留めの「ムをくわえた凜が鏡を睨んでいた。

何度も何度もやり直している。

さりやらの髪が揺れるのをちよつと見とれて見ていたとき。

「何やつとんじや

上から千代が降つて来た。

「ぐわせつー。」

「凛様を見ていたのか？いや、何度見ても  
髪を整えていたときは惚れ惚れするくらい素敵じゃなつ。  
わいじやうへん？ いうてみー。」

けつけつと笑つて、千代が飛んでいった。

「わあー。飯食つたひ今田もわわー。」

凛がわやーつひとだ。  
始まりを示すよつこ。

## 第十四話・狐のお面

今日はすべての始まり  
そしてすべての終わり

「あ、千代。私の漣、返してよ」

慌てふためいたように、千代の顔が青ざめる。

「ももも申し訳ござりません! 昨日お返ししようと思つてこたのこ

つ

「いいわよ別に

」

両手を床に着き、必死で謝る千代を横田に  
凛は空中に手を伸ばした。

「 むびつておいでえー 」

すると、ひゅるるるるるつと音がして、凛の手に  
風が巻きついた。

どうやら、昨日千代が使つていたあの風は  
凛のものだつたらしい。

『えへ。もう終わりい? もつと千代といつたかつたなーあ』

「あつちは嫌がつてたけどね」

けつと息を吐きながら、凛は自分の唇に  
紅を差した。

薄い唇がほんのり紅くなつた。

そしてそのまま狐の面を被る。

狐の面はがりがりと不思議な音を立てて  
凛の顔に密着した。

あれで息が出来るのだろうか。

「じゃ、儀式を始めようか」

声が重く変わつた。

いつものちやらちやらじてこむ凛とは違つ

大人びた声。

咲や麻貴の時はこんなにやなかつたのに。

「あんた達一人の力は計り知れないからね。一応こっちも本氣でいくから」「

そう微笑すると、傍にあつた金箱から扇子を取り出した。

模様は鶴、そして四季折々の花々。

「我稻荷之神也。風よ。木靈せよ。力を授けよ・・・」

ぶつぶつと天空に向かつて呟く。

すると、部屋の隅から天井から、揺らめいた狐がするすると現れた。

その数およそ数千。

四人はしばらくそれに見入つたが、千代だけはデスクワークをしていた。

そして、狐は舞い始めた。

お酒を飲んでどんちゃん、とかいう洒落たものではなくただ、ひたすら、幻想に入るように

狐達は天に向かつて舞い始めた。

「この者に力を分け与えよ！」

狐の舞にあわせ、凛は手を空に差し出し詠唱した。

この詠唱は、神が上の者への敬意を示すために省かずに言うらしい。

ふあっと風が舞つた。

扇子が凛の手元を離れ、音魁へぶつけられた。

相当痛かつたのか、声にならない声を押し殺している。

「・・・っ！！」

部屋の中は穏やかになつた。

「それがあんたの力よ。音魁」

音魁が黙つたまま頷く。

黒い髪が顔にかかるたが

払おうともせずに扇子を見ている。

「なあ、凛」

「なに? 音魁」

「これ、どうやって使うんだ」

凛の肩がぐくりと落ちた。

目線を逸らさないまま、音魁は聞いた。

「いま、頭の中に変な言葉流れてない?

ほら・・えーと・・なんつーのかな・・

聞いた事の無いってゆーか、ちょっとカツコイイ感じってゆーか・・

説明がめちゃくちゃだ。

「なんか聴こえる。遠くから、何かが・・・」

「でしょでしょ。それよ! そのうち覚えるから

それを言いながら扇子を閉じたりー開いたりーそれで叩いたりー。

実を言うとあたしも知らないんだよねー。

そんな道具はじめて見たしさあー。

ま、そのうち分かるよ」

なんとも頼りない神様である。

千代が頬杖を付いて溜息をしているのが見えた。

「なによ千代。分からぬものは仕方ないでしょ

矛先が自分に突きつけられた事に驚き

「いいいいえ私はなにも言っておりませんよ」

千代はパニクつて焦っていた。

「じゃあ、次。本題+ダークホース! 行きますか

言葉はおかしいのに、不思議な空気が漂つ。

柊の番が、来た。

## 第十五話・消え失せた力

まだ幼い感じの風が

凛の足元に出来た。

凛がすうーっと息を吸うと、それにつられて風が少しづつ大きくなつていいく。

そして、風は消えた。

その瞬間、凛の額から赤黒い血が流れ落ちた。毒々しいほどのそれは、凛の頬を伝い床にぽたぽたと音もなく垂れた。

「凛様！」

悲鳴にならないような悲鳴を上げて、千代が凛の元へ駆け寄る。

「大丈夫。だつてこれが定めなんだもん」息を切らしながら、凛は笑つて見せた。血に混じつて落ちる、透き通つた涙が千代をますます不安にさせた。

柊は、それをただ見守るしかなかつた。

「柊・・」

声をかけられてびくつと体が跳ねる。

何故か、怖い。

「あなたの・・力が・・開花したはずよ」確かに。

自分の周りにだけ、風があるよつに着物の裾がはたはたと揺れる。

昔の着物はやけに裾がながい。

「あたしは、あんたが現れるまでの器だつたの。力を封じ込めておくためのね・・・」

柊は、瞳孔が開いたのが自分でも分かつた。

手が震える。

凜は、俺の力を封じ込めるための器だった・・・・?

「そんな馬鹿な話があつてたまるかよ!」

自分でも驚くほどの大声だつた。

でも、構わず叫ぶ。

「そんなんなら・・・

俺が現れないほうが良かつたじゃないか!

そしたら、凜は今までどおりで傷つかなくてすむし  
千代、だつて不安にならなくてすんだじゃねえか!」

今すぐ千代に掴みかかって

なんで俺を呼んだ、と問いただしそうになつた。

でも、それができなかつたのは

麻貴が、柊の腕を強く握つっていたからだ。

だめだよ・・・だめだよ・・・と

必死で柊に訴えていたからだ。

「それはちょっと違うのよ。柊」  
はつと柊が顔を上げる。

暖かい眼差しが、柊を見ていた。

狐の面は、消えていた。

「あたしは柊がこなければ遅かれ早かれ死んでいたわ。  
この力を封じ込めておくには限界がある。  
あたしの身体は、もつて一年だつた」  
そこで凜は一息ついた。

「でも、柊が来てくれた。

正確に言うと千代が見つけてくれた、かな。  
だからあたしは、後遺症があつても、

これから生きていくのよ・・・」

そう言い終わつた時、凜の体がぐくりと傾き  
床にどさりと倒れた。

額から出でているおびただしいほどの鮮血が床を汚した。

「凛様――――――――！」

千代の悲鳴が、今度ははつきりと木靈した。

何時の間にか、朝だつた空が夜に変わつたよひに  
凛の額に巻かれた白い包帯は、赤黒く変色していた。  
一向に、凛は目を覚まそとしない。

いたたまれなくなつた柊は、部屋から出てバルコニーにいた。  
遙か下のほうでは、雲が漂つてゐる。

そしてそのせうにてには、日本列島がくつきりと映つていた。  
帰りたい。

何も無かつたかのよう。に。  
此処からいなくなりたい。

何故凛は俺の力の器になつたのだろうか。  
一生現れないかもしね、俺の。

俺がいなればよかつたのに。  
俺がこの世界に存在しなければよかつたのに。

俺が・・・

「なーにしけた面シラフしとんのじや」

いきなり降つてきた声に導かれるよひに  
柊は振り返つた。

泣きはらした千代が浮いていた。

千代が動くたび頭の簪が右へ左へしゃらしゃら音をたてて揺れる。  
「凛様の力は無くなつた。今度はお前が、頑張らなければいけない  
のじや」

紅い目はもつと赤く腫れて、それを擦るたびもつともつと赤くなる。

「・・・・・なあ、千代。俺なんで、存在してんのかなあ・・・

泣きたい気持ちをぐつとこらえて、千代に言つ。

ほんとは今すぐ泣きたいのだけれど

恥ずかしいのと、情けないのが入り混じつてなんとか堪えていた。

「俺がいなきや、凛だつて、こんな思いしないんだぜ？」

すべてうまくいったかもしね。

「馬鹿！」

ば  
し  
ん

乾いた音が響いた。

それは千代が桜の糸を叫いた音だった。  
驚きを隠せない柊の頬を、もう一発叩いた。

馬鹿——つづ！」

千代の氣のおさまるまで、  
椿は吓かれてやつた。

—そんな事言へんな！

自分がしたきやよかでないんで言へない!!

「あーあー！女の子立かしおやつたあーー！終サイアーニ

その声を辿ると、咲、麻貴、音魁が窓にもたれかかっていた。  
そして咲の言った事をよく考えて千代を見ると

（アーティストとして活動していた）

え! あ・・あの・・千代(おい・・わ・・悪か(たよ)

ナリニシニアル(ノ)ハシテシマスノ、

ちよつびり泣きそうな顔で麻貴が笑う。

一書稿曰其得一於此二位不外乎此。

「だからお前は、それに応えてやれよ。凛の分も」

その言葉に合わせて、千代は「ぐぐぐ」と頷いた。

千代がこんなに終を思っていたのには、訳があった。

## 第十六話・死ねない少女・千代の過去

遙か昔の平安時代に  
千代は生まれた。

千代が住んでいたのは都から外れた小さな村。  
そこでは、儀式が行われていた。  
雨の降らない年は、小さな少女を、神の生贊に捧げる。

「燦<sup>サン</sup>！待つよ！」

この時、千代は六歳。

幼馴染に、燦という男友達がいた。

「千代が遅いんだよっ！」

「なんですかーーー！」

二人はとても仲良しだった。

いつも一緒。

運命が一人を突き放すまでは。

ある日、千代が家へ帰ると、家族全員が泣いていた。  
どうしたのか、と千代は不審に思い

「どうしたの？みんな」

すると、祖母の手には大きな鎌が握られていた。

千代はこれを知っていた。

あの恐ろしい儀式のときに使う鎌だ。

「千代、あなたの番が来たのよ・・・」

確かにこの頃全然雨が降らない。

そして、前の、その前の年も雨が降らなかつた。

「ねえ。お母さん嘘でしょ？ 私まだ死にたくないよ

震える声で切実な願いを言つが

それが聞き入れてもらえるはずも無い。

「ゴメンね。千代」

「いやあああああああ———！」

鎌を持つてる祖母を押し倒すと

千代は家の外へ飛び出した。

どこにでもいい、逃げなきや。

今は村中が敵。

助けてくれる人なんて一人もいない。

村から、出なきや。

「千代！」

遠くで声がした。

燐が叫んでいる。

「燐？」

「こつちーこつちー！」

後ろから鎌をもつた連中が追いかけてくる。

千代は燐めがけて走り出した。

「大丈夫？ 千代」

「大丈夫だよ。私、早く行かなきや」  
草を掻き分けて、先へ進もうとしたが

時すでに遅し。

子供の力では大人には勝てなかつた。

鎌を振り上げている大人が、千代を見下ろす。  
千代が後ずさりしている隙に

燐は大人たちに抱きかかえられ、保護された。

「さ・・・燐・・・」

千代一人を死なせるわけにはいかない。

「千代！逃げろ！逃げるんだ！」

でも千代は足が震えて立つ事も儘ならない。

その時

千代の頭上から、大きな鎌が振り下ろされた。

生贊にされた少女はあっけなく死んだ。

と思われた

血を滴らせて

「ちよ？」

燐も、周囲にいる大人たちも声が出ない。

そして

「燃。 わよなう」

そうこうと、十代ばかりひりひりと歩き回った。

「ば  
・  
・  
化  
け  
物  
！  
！  
！」

鎌を持っていた大人が再び千代へ鎌を向ける。

が、千代は倒れることはなかつた。

このとき、千代は何故死ななかつたのか。

それは自分でも分からぬ

ただ、そのときの記憶ははつきりと鮮明に覚えている。  
そして、頭蓋の傷も癒えた、明治の時代に、

ふつりと糸が切れたように千代は死んだ。

そしてまた、生まれてきた。

こんどは、王家の娘として。

不思議な輪廻。

時は廻る。廻る。

死ねない少女。

此處で死んでも、私はまたいつか生き返る。

不思議な輪廻。

時は廻る。

## 第十七話・否

「千代」

今まで過去の自分を見ていた千代がはつと現実に引き戻された。

「凛、起きたつてさ。傍に居てあげた方がいいんじやない?」にこつと咲が笑いかける。

千代は慌てて部屋の中へ飛び込んだ。

その後すぐに、千代の嬉しそうな涙声が聞こえた。

「よかつたね。千代ちゃんも、凛さんも」「だな」

麻貴と音魁は顔を見合わせて笑った。

同刻。

水神の庵は凛の力が無くなつた事を知つた。

その同刻。

湾・斬・満にも、そのことが知らされた。

「やはりな」

ぼそりと庵が呟く。

その右隣で、秦が心配そうに庵を見ている。

敵は王家の姫をさらつた。

それは、もうすぐ攻めてくるといつ合図でもある。

凛の力は女とはいえども強かつた。

しかしその凛の力は消え、代わりに子供が四人。力任せに暴れる事は可能だろうが  
凛ほどの力を持っているのか。

答えは「否」だ。

ついさっきまで学生だった弱々しい子供に何ができるよ。

秦は唇をかみ締めた。

「庵様。やはりあいつら如きが凛様の後継など到底無理なんじゃ……」

「渋い顔をして秦が言づ。

庵は無表情のまま立ち上がつた。

「何処へ行かれるのですか？」

「……お前も來い。それと秦……」

秦が不思議そうな顔をして庵を見る。

鋭い目が秦を捕らえた。

秦は顔色一つ変えることなく、庵を見る。

「凛は所詮女だ。女が一人いようと欠けようと大差はない。

それに、邪魔な奴は黙らせておけば良いだけの事だ」

身と身体に纏つた布と水を翻し

庵は部屋から去つていった。

斬はその頃、蔭を引き連れて凛の部屋にいた。

満も湾も、煩と蘭を引き連れて、凛の部屋で待機していた。

「まさかお前があんな餓鬼の力の器になるなんて

思つてもなかつたぜ。凛」

喉の奥から低い声が聞こえる。

凛は顔を伏せた。

「べつにいいじゃん。斬に関係ないもん」

完全にふてくされている様だつた。

「にしても、大丈夫なのか？凛」

「出血がひどかつたらしいな」

湾と満が代わる代わる声をかける。

蘭と煩も声をかけようとしたが

やめたほうがいいと蔭に止められた。

「なあ蔭。庵様と秦がこない。どうしたんだろう」

「気まぐれだもの。でもそのうち来るわよ」

「大丈夫だよ、蘭。一人ともこちらに向かつてゐる

耳に手を当てて煩が言った。

煩は耳がいい。

その瞬間、ぱたりと扉が開いて

二人が入ってきた。

「ね！あたつたでしょ」

くすりと、煩が笑った。

でも、秦の顔色は、青ざめている、に近かつた。

「どうしたの？秦。大丈夫？」

髪を翻し、蔭は秦に駆け寄った。

「・・・

冥堂の手下達が、こっちに向かっている・・・。  
数は・・・中体が七体。完全体が五体。

あと、冥堂自身もこっちに向かってきてる!」

何人かを除いた顔が青ざめた。

そしてその青ざめた顔は、終たちにもはつきり分かった。

## 第十八話・魔性の男

五大神たちの顔が青ざめているのが分かつた。

「ど・・どうしたんだろう?」

腕に巻きついているチェーンを握り締めて麻貴が呟いた。  
何を話しているのかまでは分からないが。

その時、柊の五感が唐突に何かを叫んだ。  
危ない。

危険なものが向かってきている。

「・・危ない」

「え?」

聞き取れなかつたよ?

咲が聞き返した。

「危ないつつ！・・・！」

空がじゅうと翳つた。

黒い雲が青かつた空を包む。

それに気づいた柊は真っ先に空へと飛び出した。

「柊ッ！」

音魁が止めようと手を伸ばすが  
あと数センチ、届かなかつた。

「くそつ！咲！湾たちを呼んで来い！」

「わかった！」

指示に従つて、咲は部屋の中へ飛び込んだ。

柊はどんどん黒い雲に向かつて空を走る。

「柊くん・・・」

体が衝動に駆られたように

麻貴も手すりに足をかけ、走り出した。

危ないところで、音魁に右腕を掴まれる。

「おい！麻貴！馬鹿！何してんだ！？」

「だつて・・だつて柊くんがあのままだと死んじゃうよー。」

掴まれた右腕を振りほどくと暴れる。

音魁はなんとか机に引きすり込もうと、麻貴を引張る。

放して、林ぐりか、林ぐりか、

「なんで終くん・・・空中を走れてるの？」

夢中で空を蹴つて走つてゐる格は

黙れ。おまえはアラタの抱き主だ。

あれ? なんて俺走れてんの? こんな所? 「思議」ふつぶつと、頭(て)に思(おも)う。

が、異変は無い。

「おつかしいなあ・・?」

ひゆ。

無防備になつて隙を見せた柊の横を、何かが通つた。

三

頬に赤い線が入って、赤い血が顔をのぞかせた。

耳に押し込まれたように響いた麻貴の声で

柊ははつと後ろに振り返った。

おかしな化け物が一匹

「二〇〇・〇・一」

無意識に手を体の前に翳す。  
カザ

食われるつ

しかし、体に襲ってきたのは、咬まれた様な痛みではなく、びしゃびしゃという水音と、生臭い鉄の匂い。目を開けると、化け物は死んでいた。

「アレ?」

まわりには柊以外味方は誰もいない。  
なのに化け物は死んでいる。

「もしかして・・・」

腕を見ると、今朝はめた手甲が鈍く光っている。  
その周りに、ひゅうひゅうと薄い風ができる。

「俺の力かな？」

のん気に手甲を観ていると

後ろから裂くような風音が聞こえた。  
がしゃんっ！

危機一髪で振り返った柊の手甲が

さつきより大きな化け物の力を相殺した。

化け物を睨んでいた柊がふつと化け物の後ろを見ると  
左の眼を、長い茶色の髪で隠している

青年が見えた。

「・・・・？」

牛車に乗っている。

妖たちが牛車の周りに集まって、きいきい騒いでいる。

青年は柊に笑いかけた。

首が揺れたので、癖の無い髪も一緒に揺れて  
隠していた左眼が見えそうになつた。

「その男が、冥堂だ」

いつのまにか後ろにいた庵が柊に語りかけた。  
庵のピアスの水晶が光る。  
眼も鋭く光った。

「姫をさらへ、この世界を壊そつとする魔性の男だ」



## 第十九話・見込み

そこまで喋ると、庵は冥堂を睨みつけた。

くすくすと小さな笑い声が冥堂の口から漏れる。

「酷い言い方ですね。僕が患者みたい」

「嘘ではないだろう」

言葉に怒りが混じつていた。

「元は同類だったのにね」

突然冥堂が発した言葉に、庵は我を忘れて飛び掛けそうになつた。手を前に掲げ、水を発しようとした時。

「庵。止せ」

庵の目の前に湾の腕が現れた。

実態は無いようだが、長い金色の槍が庵を妨げる。

それを手にしているのは、満だった。

傷を負つていてるくせに、凛も手を伸ばしている。

ただ一人、斬だけが、庵を妨げなかつた。

「やりたいやつにはやらせときや良いのによお

「斬・・・。黙つとけよ。仲間割れは起こしたくなえかんな

湾の張り詰めた言葉に、くくくと斬は笑つた。

「其処までにしたらどうなんだい？」

はつと柊が顔を上げた。

牛車から降りて、冥堂が全身を現した。

黒い羽織で全身が包まれている。

ところどころに裂け目があり、そこから

氣味が悪いほど真っ白な手を覗かせていく。

「やりたいんなら、僕はいつでも相手するけど。なんなら今でもいいよ。

全員ぶち殺してあげるから

くすくすと、笑い声が聞こえた。

「ねえ、千代。大丈夫・・かな」

下から見上げていた咲が、隣にいた千代の着物の裾を掴んだ。

「五大神じやから大丈夫だとは思うが・・」

千代が呟いたとたん、麻貴が声を荒げた。

「違うよ！咲ちゃんは、柊くんの事を言つてるんだよ！？」

麻貴の聞いた事の無い大声に

咲も、音魁も、千代も肩をびくりと振るわせた。

「ひ・・・柊は・・・」

柊は・・。

ひゅん、と音がしたかと思うと

柊の喉元には、冥堂の手がかけられていた。

「おもしろいね。君」

「今度あいつは手合させ願うよ」

そう言つと、牛車に乗り込み、風の如くに消え去つた。

## 第一十話・何で殺されなかつたの？

「い・・行つちまつた」

黒い雲は散り、青空が戻つてきた。

「柊！」

部屋に戻つてきた柊に、千代が飛びつく。

「怪我はないな！？・・・よかつた」

麻貴も、咲も音魁も、ほつと胸をなでおろした。

そして、柊自身も。

まさか生きて帰つてこられるとは、思つても無かつた。

あの時。喉元に手をかけられたとき、あれが最後と思つていたが・。

「なあ千代。五大神の中に、冥堂はいたんだろう？」

思つても無かつた言葉に、千代がはつと言葉に詰まる。

「わしは・・しらん。が、そんな事は無いと思つが」

「そうよ。突然何を言い出すのよ。柊

「あいつは敵だ。まずありえない」

千代の言葉を援護するように、蔭と秦が

次々に言葉を投げかける。

「だつて、同類つて言つてたんだ」

たしかにあの時、あいつは庵にむかつて「同類」と言つた。

それを聞いたときの庵の顔は、恐ろしく怖く

恐ろしく、悲しい顔だった。

「それは・・それはきっと、あいつも神の端くれだからじやないのかな」

煩が、ぼそりと呟いた。

「庵、あいつの言葉に惑わされすぎつー」

ぽかっと音がして、凛が庵の頭を殴る。

「…………悪かった。でも、あの時殺しておけば……」

「無理いうなよ。俺らじゃ殺せない。よくて相打ちつてやつじやねーの？」

近くにあつたソファーに、音をたてて湾が座る。

すこしホコリが舞つた。

「ごほ」「ほつ」と、咳き込む。

「でも、なんで柊を殺さなかつたんだろうな……」

腕組みをして、満が考えるような格好をする。

あの時点で、柊は殺せたはずだ。

あんな、神でもなんでもないただの子供……

「殺さなかつた、じゃなくて殺せなかつた……じゃないのかな？」

顎に人差し指を当てた凛が、笑うように呟く。

「まさか。ふざけた冗談言つんじゃねーよ」

「あら、あたしはちょっと本気だけど?」

闇の中に一つ、大きな大きな屋敷があつた。

カガリビ  
アンドン

どの部屋も畳が敷かれ、長い廊下には怪しげな篝火の行燈。

その屋敷の最上階の奥の奥の部屋。

そこに、冥堂は降り立つた。

フスマ  
襖をぱしんっとあける。

部屋の中で一番目につくのは、大きな、牢屋ににた櫛。

その中に少女がひとり。

手足を拘束しているわけでもなく、ただ押し込めていいるだけ。

セミロングで、ブリーーチされた栗色の髪。

フリルがついたドレスを着せられているから

日本の女の子には見えない。

「小夜様。ご機嫌いかが?」

冥堂は、少女・小夜・に笑いかける。

生きた畠をしていない少女は、そのまま顔を上げた。

「・・・・・・此処からだして」

「それは出来ません。まだ時は満ちていませんから」

「此処から出してよ・・・・・。私・・・」

その声は、櫻を閉める音で搔き消された。

第一十話・何で殺されなかつたの？（後書き）

一応書いときます。

ブリーチ・・・髪の色を脱色させる事。

B L E A C H（久保帯人・週刊少年ジャンプ掲載）

ではありません。

分かるかもしけないけど、一応。

## 第一十一話・咲の決意

「煩！神の端くれつてビーウー」と…?」

少々怒り気味の咲が、壁をけつとばして言ひつ。  
その音があまりにも大きかつたので、煩は両腕を体の前に持つてき  
た。

軽い拒絕反応だ。

「まあまあ、そう怒つても煩が可愛そつだろ?」

「お前は黙つてろ。クソガキ。それとも今此処から蹴りおとせれで  
一か?」

「いえ・・・モウシワケアリマセン・・・」  
一瞬で終を制した。しかも片言にさせるとは。

その恐ろしさに、みんなの体が凍りつく。

「で!ビーウーことなのよ。煩」

おどおどしながら、煩が一步前に出た。

この五大神になるには、実力が要るんです。

強さはもちろん、その神々の位にあつた知識や能力が  
絶対に必要なんです。

僕もつい最近知ったんですが、

満様・湾様・凛様・庵様・斬様は昔からの知り合いだそうで。  
そしてその知り合いの中に、冥堂もいたらしいんです。  
でも、冥堂は五大神の位に付く事は出来なかつた。  
何億という挑戦者の中で、運命なのが  
この五人は受かっちゃつたんです。

で、哀れに思つた満様や湾様は  
冥堂を配下に入れようとしたんですけど  
時すでにおそしつてやつです。

冥堂は闇の世界に足を踏み入れちゃつたんです。

多分腹癒せつてやつだと思うんですけど

冥堂は、この世界を滅ぼそうとしてるんです……

「煩。それホント?」

咲の問いに、煩がこくこくと頷く。

うつむいたまま、咲は顔を上げない。

「咲。気に病むな」

「そうよ。咲。どうしたの?」

千代と蔭が咲の傍による。

柊もちよつと心配になつた。

でも、これくらいの事で気に病むか?

つてゆーか、俺らが気に病む所なんてないだろ?

「気に病んでなんかないわ」

そつ言つと、がばつと顔を上げた。

「何よその理由——！腹癒せですつて——！？」

ふざけんのも対外にしろよあのクソボケ——！

大体親の教育がなつてないつづーの！あんな奴！

あああ！今すぐにも一発ブチかましてやりたい——！

お前も親の教育なつてないんじゃねーの？ｂｙ一同

咲は其処まで叫び倒すと、空に向かつて

「お前なんか頭に電柱柱落つこちてきて死んでしまえ——！——！」

と、ある意味無理な事を叫んだ。

そんな様子を、中から凜が見ていた。

「にぎやかー。つてゆーか咲面白すぎーーつ！  
頭に電柱柱？あははははっ！無理無理～」

お腹を抱えてのたうちまくつている。

「おい。大丈夫か？凜」

「あははは！無理～もお無理～。わやははははまつ！」

あははは！わ・・・笑い死にしそ・・あはははつ！ひやはははまつ！」

もう一度声をかけようと、湾は手を伸ばしたが

やつぱりその手を引っ込めた。

今声をかけると、なんか怖い事が起こりそうだ。

「よつし！決めた！私絶対あの馬鹿倒す！」

みんなが引き気味の中、咲は大空に拳を掲げて

そう、宣言した。

まだ、前奏曲に突入したばかり・・・・・・

## 第一十一話・地獄が再び

「よし！わたし絶対あの馬鹿倒す！」

咲がそう宣言したのを、中から湾は見ていた。

「・・・早めに倒したほうがよくね？」

啖いたとたん、庵が湾を睨む。

「じゃあなんでさつき殺<sup>ヤ</sup>らせてくれなかつたー？」

「それはお前が死ぬかも知れないからだ！」

腹の虫が治まらない庵は、部屋から出て行こうとした。

「待つて。庵。あたし天才！いい事思いついちゃつたあ」

出て行こうとした庵を、凛が引き止める。

はつきり言つて、今の言葉はうつとおしい以外の何でもない。

「あのね！地下に修行用の場所があるでしょ？」

人差し指を立てて、いかにも「ひらめいちゃつた！」オーラを出して

凛は無邪気に言つた。

「でね、そこの・・・凛！それはダメだ！」

慌てて、満が凛の言葉をさえぎる。

凛は膨れつ面になつた。

どうみても可愛くはないのだが。

「満！なんでダメなのよお～つ！」

「危険すぎる！現にお前はあれで死にそうになつただろ！？」

「それは昔の話でしょ？みんな昔より強くなつたじゃない？」

あれくらいできると思うわ？終たちだつて大丈夫よ！」

「それは余計ダメだ！あいつらは戦つたこともない子供だぞ！？」

「大丈夫つたら大丈夫！天心甘栗五十袋賭けるつ！」

「あんなあ・・・つ」

満の忠告も聞かずに、凛は大きな鍵を取り出した。

金色の大きな鍵。光に当たつて、それが鈍く光る。

それを見て、斬だけがにたつと晒つた。

その頃、咲の迫力にやりきれなくなつた蔭はひとり部屋の中に戻ろうとしていた。

(なんであんなに騒げるんだろ・・私は無理だわ)  
部屋に戻つたとき、一番最初に目に付いたのが斬の不適な笑みだった。

(・・・・危ないことが起きそう)

斬が晒うのは、決まって何か危ないことが起こる前だ。

あの修行のときも・・

!

笑みが似ている。

あの時と。

そつくりそのまま、あのときが戻つて来たように、蔭は膝からがっくりと倒れた。

「蔭!? 大丈夫か?」

異変に気づいた蘭が、真っ先に蔭へ駆け寄る。

「・・・あの時が戻つてくる・・・」

蘭の後に続き、中に入ってきた秦が、顔色を変える。

「あの時つて、まさか煉獄凶のことか!?」

こくこくと、蔭が力なく頷く。

「・・・くそつ!」

「ねえ、煉獄凶ってなあに?」

はつと振り返ると、不思議そうにこちらを見ている麻貴がいた。

奥歯をぎりぎりと噛み締める。

何も知らないこの子供。

あの地獄を知らないなんてなんて恨めしい。

この記憶をそつくりそのまま叩き込んでやりたい。

「ねえ、なんなの??」

秦が駆け出そうとした。手に鋭い小太刀を持つて。

「ダメっ！何やつてんだよ！アホっ

感情的になつた秦を蘭が止める。

そこでやつと、秦が落ち着いた。

まだ麻貴が不思議そうに見る。

「・・・・・ 煉獄凶は、地獄だ・・・」

煉獄凶。

この神殿の地下にある、神々の修行場。

此処で修行をして、生きて帰つてこれる確率はよくて三十%。

毎回毎回、何人もの神が命を落としている。

その死体を片付けようとする者が誰もいないので、死体は風化し、砂となり

どこかへ飛んでいってしまう。

だが、風化するのに恐ろしいほどの時間がかかるので

煉獄凶は死体の山となっている。

焰が渦巻き、鬼がひつそりと腹をすかせて獲物を待つている。

そこはまるで地獄絵のような場所である。

「だから煉獄凶なんだ。怖いところだね」

話を聞き終えた麻貴は、両手を握り締め、秦と目線をあわせなかつた。

何か悪いことを聞いたのかかもしれない。

こんな記憶を持つているのなら、誰だつて思い出したくないはずだ。

なのに、無理に聞き出してしまったような気がする。

「なんか、ゴメンね。嫌なこと思い出させちゃって」  
秦は目を丸くしたが、すぐにフンッと顔を逸らした。  
周りの空気はどうと重くなつた。

その空氣を知つてか知らずか、るんるん気分の凛が  
スキップでやってきて

「煉獄凶で修行するから。これもう決定事項だからっ！  
異議があるやつは首を真つ一つに切るから」と、恐ろしいことを笑いながら言つた。

お前がやらないからって、人の命を無駄にするような事言いやがつて。

つてゆーか五大神たちは反論しなかつたの？

「うん！みいーんなやる氣満々だつたよお？」

麻貴の心の問いに、凛は嘘っぽちを並べて答えた。

遠くで、湾と満がぶんぶんと首と手を振っているのが見えた。

「それに、あたしの式狐<sup>シキギツネ</sup>つけたげるし」

凛は、つま先を立てて舞うと、幻術のような狐がわらわらっと現れた。

「一度田だが、これは何度見ても見慣れない。

柊たちも部屋に戻ってきた。

すると、その柊たちの体にするすると狐が巻きついてきた。

「わー？」

そして、体に入り込んだ様に、消えた。

それは柊たちだけではなく、秦や庵のような神もそつだつた。

「あたしの力は消えちゃつたけど、治癒ならできるよーん」

かかかつと、下品に凛は笑った。

千代は、この凛の笑い方が、なにより嫌いなのだが  
あえて我慢した。

この狐を、ひとりだけ拒んだものがいた。

斬だつた。

「俺はいらねえ。」んなの邪魔になるだけだ

凛はむくれた。

「いいわよべつに。あんたなんかこつちから願い下げだしーつ！」  
ベえーつと赤い舌をだして、凛も抵抗した。

そして鈍く光る鍵を持ち直すと

「行こ？」

とだけ言って、人質のように棒を引っ張り出した。

地獄へ、向かうことになった。

## 第一十四話・別々

それは地獄というには、あまりにも言葉が足りない。

「此処が煉獄凶？」

柊が、息を呑んだ。

死体が山のように積み重ねられている。  
ちょっと、引く。

「やだな・・・怖いよ・・・」

さつきとは打つて変わつて、咲がおびえだす。

風が吹き、かたんと死体が揺れたので、咲は喉の奥からひつと  
声にならない声を出し、柊にしがみ付いた。

それに驚いた柊は、咲の手を払つた。

が、もう一度咲はしがみ付き、

その様子を千代がニヤニヤ見ている。

「じゃあ・・・頑張つてねっ！」

水が流れるように凛が手を振る。

その瞬間、みんなが別々に別次元へ飛ばされた。

どすつ！

柊はいきなりの事に驚き、尻餅をついた。

そして、その後すぐに目に入ってきたものを見て、驚愕した。  
それは口からだらだらとよだれを垂らした、鬼だつた。

しかもただの鬼じゃない。

上半身が三つ有り、下半身が一体になっている。

無駄に大きい。柊たちなんて一発でオダブツになりそつだ。  
さて、どう対処しようか？

なんてのん気なことを考えている柊の横を、何かがすり抜けた。  
「きいやああああああああ―――つ―――！」

咲の髪の毛だつた。

「来ないでええええーつ！ 気持ち悪いいいいつ！ …！」

「がづがつ！ 」

次に目を開けたときは、鬼は血まみれで死んでいた。

「ふうつ！ あー怖かつたあつ！」

・・・あんたが一番怖いと思いますけど・・・？

「咲ちゃんすごいねえつ！ 見直しちゃつた」

そこは見直すところですか？

同刻。

「此処・・・煉獄凶でもまだマシなところだ・・・」

煉獄凶は、百の修行場に分けられている。

数字が大きいものほど、レベルが高い。

ちなみに、此処は煉獄凶第六十五番「血雨」チサメ。

「千代がいない。あの子達について行つたのね

「最高は九十一か。だれだろ・・・？」

「あ・・・ほんとだ。感じる。九十一と八十八」

「なあ、これつてもしかして・・・」

煩が耳に手を当てる。

この戦い方、なつてない。

我武者羅に、ただ前にあるものをぶつ潰していく。

「もしかして・・・・・

同刻。煉獄凶八十八「死魂」シノン

すでに戦いは始まっていた。

「ちつ・・・凜のやつ。こんな生ぬるいことに送りやがつて・・・

「そうか？ 此処で十分つ！」

イライラと舌打ちをする斬を湾が宥める。

「煩たちは六十五か。凜、手加減したんだな」ナダ

満が腕を組んでほつと笑う。

大事な部下だ。何かあつたら困る。

「そうか・・・あのボケ女・・・。

あいつらを殺す気なんだろ」

「あいつらって・・・まさか」

庵が襲つてきた鬼を水で跳ね返す。

「格とかいう餓鬼だ」

「うふふふつ。みんな・・・がんばつてねえ〜」

当の本人は、片手に点心甘栗

片手にお茶をもつて、完全に楽しんでいた。

## 第一一十五話・それぞれ

同刻。煉獄凶第九十一「鬼火」。

「いやあああああああ———！」

相変わらず響くのは咲の大きな絶叫。  
そしてどしゃどしゃという、死の音。

「おい咲。もうちょっとましな攻撃の仕方をしろ」

「だつて・・・千代ちゃん見てよ！あの氣色悪い鬼つ」

涙目で、咲は一匹の鬼を指差す。

片方の目が、どうと落ちていて

原型すら保てていない、確かに氣色の悪い鬼。  
が、咲めがけて走つてくる。

「こちくんなああああああああ！」

咲の髪が乱れるように、鬼へ飛んでいき、鬼を真つ一つに割る。

その様子を、柊と麻貴と音魁はぼーっと眺めていた。

「すげえな・・・」

「ある意味な」

「咲ちゃん、もう技の名前言わずに発動出来るんだあ。すつーーーい」

麻貴ひとり、手を叩いて本気で凄いと思つている。

と、柊の横を何かが通つた。

「来たつ！」

鬼・・・・じやない。

何に例えればよいのかいまいちよく分からぬ  
まあ、一言で言えば妖。

「なんだこれは。きもちわり・・・「柊ぐもつーーーはボクにやらせ  
てつ！」

ぱっと、柊の前に麻貴が飛び込んだ。

麻貴の見据えた目がきらりと光る。

「リウーー！」

ぶんつと右手を上げる。上げた反動で、龍の目が紅く光る。

「敵はあいつだよー！リウー！」

『承知』

どうやら、リウーーのは、その龍の名前らしい。

リウーーは、口を開けると、その妖を頭からぱりぱりと食した。妖は咲のような絶叫を上げ、消えた。

「リウーー。ありがとーね」

『これくらい造作もないこと』

麻貴がやつたーっと飛び跳ねて、嬉しそうに戻ってきた。

「凄かつたでしょ？」

「え・・あ、うん」

曖昧に、柊は答えた

が、柊も音魁も聞きたい事は一つ。

「何で名前がリウーーなの？」

麻貴がにぱつと笑った。

「リウーーは龍じゃん？でも、「リュウーー」だつたら味気ないじゃん？だから「ユー」をとつて、「リウーー」。可愛いでしょ？」

本人はとても気に入っているみたいだが

こちら側からすれば、よく分からぬ。

同刻。「死魂」

ただひたすら戦うのみ。

目の前にいる敵を叩きのめす。

肉をえぐり、敵の鮮血をこの身に浴び

自分は強くなるのだ、と願い、前に進む。

「・・・・なあ満。おかしくないか」

「・・・確かに。いくら戦つても、敵が減らない。数に限りはある

はづだ

そうだ。

鬼や妖だつて、永久に生きれるわけではない。  
そんなに数が増えるわけでもない。  
なのに、多すぎる。

同刻。「血雨」

「つ・・・疲れた」

煩ががくりと倒れる。

「煩つ！大丈夫か」

敵をぶつ飛ばした蘭が、急いで駆けつける。  
敵の攻撃を受けたからなのか、青黒いアザ。

「治療してやる。休め」

自分の身長と変わらない煩を、片手で担げりとした。  
でも、心がいくら男でも体は女。

男の体を女が片手で担げるわけがない。

「貸せ。俺が持つてやる」

ぱつと手を貸したのは、秦だった。

蘭は突然の行動に驚き、立ちすくんでいる。

「んだよ」

「いや・・・。あのすかしてて、いつもなんかムカつくような物言  
いで

氣分の悪くなるようなやつだったお前が、まさかこんな事するとは  
思わなくて

「てめえ、なぶり殺されてえのか？」

相変わらず目は冷たい。

が、何かが変わった気がする。

蔭は、秦の後姿を見て、くすつと笑った。

「何てめえも笑ってんだよ」

「べつに」

何が変わったのだろう?

この修行をしてるという事は、もうすぐ敵の陣地へ乗り込むという事。

ゲームが、始まるという事。

命掛けのゲーム。

終わったら、私も何か、変わるかな?

終わったら、あいつの変わったトコ、分かるかな?

## 第一一十六話・水晶をみつけだせ

暗いくらこの空間の中を、ボクらは旅をしている。

「なあ千代。此処でずっと敵ぶつたおせばいいのか?」「そろそろ同じ」とに飽きてきた柊は、親指ほどの小鬼を足で造作なく踏み潰して、言つた。

「そんな訳なかろう。きっと此処の何処かにある水晶を手にしなければ」

後ろから襲い掛かつてきた妖めがけて  
千代は自分の簪カンザシを突き刺した。

悲鳴とともに妖が消える。

「何処かって・・・こんなとこ右も左も砂漠じゃねーか!」  
思わず柊は大声で激怒してしまつた。

此処の何処かって、この無限のような空間を

ふらふら水晶を求めて彷徨えつてか?冗談じゃない。ふざけるな。

「それに喉が渴いた!」

「あの向こうに湖がある。ついでにこの砂漠の空間で水晶を見つけないと

わしらは一生出てこれんぞ」

賢明な判断だ。

音魁はそう思つて、湖めがけて歩き出した。

「まつて!音魁どこいくの?」

「千代の言葉は合つている。まずはあの湖を田植す」  
すんずん歩いていく音魁に遅れを取らないように  
咲と麻貴も歩き出した。

その音魁の後姿が、柊にはやけに大きく見えた。

その頃、「血雨」では、煩の手当でが終わつたところだった。

「よし。オッケー。大丈夫だぜ。煩！」

「ありがとう。蘭。さすが女の子だね」

「女じゃないつ！バカ煩つ！！」

「ぱしんと、蘭が煩をはたく。

でも、蘭の顔はちょっと赤くなっている。

照れている証拠だ。

なんともほほえましい光景である。

その様子を、蔭は楽しそうに見守った。

「はいはい。痴話喧嘩はそこまで」

「こんな時に夫婦漫才しなくてもいいだろ」

その言葉に反応して、二人一緒に秦をはたく。  
ぱしん、なんていう音じゃなく、ホントに痛そうなぱしーんという  
音だった。

「何すんだコラア！ つーかなんで蔭は叩かねーんだよー！」

「蔭は女の子じやん」

もういちど、渴いた音が響いた。

「もういいでしょ。とにかく、今は水晶を見つけるわよ

「そうだね。怪しいのは・・・あの寂れた宮殿かな<sup>サビ</sup>」

「前の修行もあんな感じの所だったな。ん? なんで倒れてるんだ?

秦

「てめえ・・・もう自分がやつをやった事忘れやがって・・・殺してやりたい」

なんともにぎやかな四人組だった。

同刻。「死魂」の四人組は  
水晶のために戦っていた。

「うおおおおおおおおおお！」

戦いの音しか聞こえない。

ローマの宮殿のような所。秦たちの所みたいに寂れているんじやな  
くて

今でも誰か住んでいるんじやないか、と思えるくらい綺麗な宮殿。  
だから、怖さが増す。

ところどころに飾られた鎧<sup>アーマー</sup>が、大きな剣を持って  
襲い掛かってくる。

「おらああああ…」

テノヒラガツショウ  
掌を合掌させて、それから片方を前にだす。

すると、その手から大きな焰が溢れ出し、周りを焼き尽くした。  
これは、湾にしかできない特別な技。

「おい湾。もう少し焰を小さくしろ。水が出せないだろ」「  
だーかーら！これが限界ッ！ようは倒せばいいんだよ」  
この四人は、それぞれがそれに因果関係を持つている。  
チームワークはいほうではない。

再び、柊たちにもどる。

遠くに見えた湖は意外と近場で、この間妖にも合わなかつた。

「ラッキーだね」「だねっ」

顔をあわせてくすくす笑う咲と麻貴。いつも楽しそうである。

「そういえば、千代ちゃんはさつきから持つてるのは何？」

千代の掌には溢れ返るほど金玉があつた。

「千代！抜け駆けは許さねえ！俺にもよこせつー！」

「騒がなくともやるつもりじゃ。この金玉はな、

死んだものの魂を収めた飴玉じゃ。これで我々は生きている。  
味は・・・甘い。ハズレは辛いがな」

柊は、出した手を引つ込めた。

死んだものの魂？

これで我々は生きている？

「・・・・・酒とか、甘栗とかじゅねーの・・・・?」

「ああ、アレの元はこれじゃな」

不思議な飴玉は、みんなの掌に一つずつ落とされた。  
淡い水色、透き通るようだった。

第一十七話・飴玉

「食べてみい」

その飴玉は恐ろしいほど不気味に光っていた。

「わーい！ いただきまーすっ！」

何の疑問も持っていない麻貴が

その餡玉を口に放り込んだ。

卷之三

突然麻貴が倒れた。

格が体を揺すると  
口から唾

同刻  
「血雨」

守護組四人がたどり着いたのは、寂れた宮殿。

一步一歩がぐたでまじこと妙な音が

しばらく進むと、四つに分かれた階段があつ

その階段を伝うと、別々の道が切り開かれている。

「一人ずつ尊

「一人ずつ違う道を進む。行き止まりになつたら戻つてくる。」

一応、<sup>ブンキ</sup>聞機を持って行く。これでどうだ？

聞機とは、現代で言つてトランシーバーのような物。ヘッドホンに近い形をしていて、それを首に引っさげる。

これで、離れていても会話が出来る。

「じゃ、私はこの道を行くわ」

蔭が自分の目の前にある階段を差した。

「蔭がそこなら、俺は此処に行く」

すぐ右隣の階段を蘭は見据えた。

「うむ・・・。じゃ、僕此処行くね」

一番左端の階段。蔭が選んだ階段の左隣。

「仕方ない。俺は此処に行く」

秦が、一番右端の階段の前に立った。

「じゃあ行くわよ。みんな」

「」「」「健闘を祈る!」「」「」

それぞれ、走り出した。

同刻。「死魂」。

此処の宮殿は無駄に部屋がありすぎるので、だから、何処に水晶があるのか、検討が付かない。しかも聞機を使わずの単独行動。

チームワークはやっぱり悪い。

「この部屋も誰もいねえ・・・。つまんねえじゃねえか」

そして、斬は三階を中心的に徘徊していた。

しかし三階はずれだった様で敵が一匹も現れない。

と、その時

「危機キキキキキキキキ奇危機キキキキキキキキ鬼！」

奇声を発したサルのような妖が、斬めがけて走ってきた。  
鋭いつめに、すばしつこい足並み。

「ハン！」

斬は、それを軽くあざ笑つた。

そして、その妖を、自分の大きな掌で  
ぐしゃりと握りつぶした。

それは呆気なく死んでしまい、切り離された胴体がびくびくと動く  
だけだつた。

「なんだ・・・雑魚ザ・かよ」

もつと俺を楽しませてくれる奴等はいねえのかよ？

「はははははははは……！」

## 第一十八話・煉獄凶・柊組編其壱

(音魁) 「気に食わない！」

(麻貴) 「何が？」

(音魁) 「この一十九話めのタイトル！」

(咲) 「なんで？」

(音魁) 「柊組つて書いてあるだろ？ なんで柊なんだつてこと…」

(柊) 「そりやー・・・主人公だから？」

(咲・音魁) 「えええ！？ 主人公つて柊！？」

(麻貴) 「柊くんじやないの？」

(柊) 「麻貴はいい奴だな・・・。 オイ、殺すぞテメエら・・・」

(千代) 「いい加減にしろーッ！ 馬鹿共！」

と、いう会話を展開していたのだが、

頭にきた千代の蹴りがひとり一発ずつ入ったので

柊たちは、富殿にむかって歩く事にした。

「でもね。なんかあんまり怖くないところだね。

蔭ちゃんとか秦くんはとっても怖がってたのにね」

麻貴が下唇に人差し指をあてる。

なにか考え事をしている時は、いつもこれなのだ。 麻貴の癖。

「ああ、それはな。

凛様が修行に入ったときに、あいつらも一緒に行きたいって駄々こ  
ねて

それで連れてつたのはいいんだが

まだちつちやい頃だつたから死にかけになつてな。

だからあんなに恐れていたのじや。

まあ、その時もわしは賢かつたからな。付いて行くなんて事はしな

かつたのじや

」

自業自得つて事だ。

麻貴はちょっと安心した。

時には砂嵐に見舞われ

時には泥濘<sup>ヌガルミ</sup>に足を取られながら

時には敵と戦いながら

柊たちは宮殿に到着した。

「宮殿つて……」れ・・無駄に大きいね」

宮殿を見ての一一番最初の咲の感想がこれだった。

「ハズレじゃ

「ハズレ？」

「大きい分、部屋が多い。水晶が見つけにくいう」とじや

「それ最悪じやん？」

咲が溜息をつく。

不安になってきた。

私なにやつてんだろうなあ・・・・・。

帰りたいかも。

だつて怖いよ？死ぬかもしれないんだよ？

「なに辛氣くせえ顔してんだよ。もとはといえбаお前の所為なんだ

からな」

俯<sup>ウツム</sup>いていた顔をあげると

いかにもめんどくさそうな顔をしている柊がいた。

肩にかかりそうでかかつてない、男にしては長い髪が砂嵐とともに舞い、それを手でぱりぱりとかいでいる。

「そーだよつ！やり始めようつて言つたの、咲ちゃんだよ？」

下の方から声が聞こえる。

自分より、遙かに背の小さい麻貴。

長い裾<sup>スカート</sup>からちょこんと出ている可愛い指先が

しつかりと、咲の冷たく冷えた手を掴んでいた。

「俺はよく分からんが、万が一の時は護つてやるや  
ぽん、と温かい手が頭の上におかれた。

音魁の茶色がかつた目は、優しく咲を見る。

「そうじや。なにもお前一人じやない。

此処に、頼りないし、ダメダメな一応主人公の柊と  
そこまで言つて、柊を見る。

「背は小学生並みに小さいが、まあ使えそうな麻貴と  
嫌みつたらしく麻貴をみて

「髪ばかりちやらちやら伸ばしている音魁と」

散々暴言をはいて音魁を見て、

「この天才少女、千代様があるじやろ」

最後、偉そうに自分を指した。

「・・・・うん！」

にっこり笑顔になつて、咲が笑う。

ここまではいいのだが・・・・

「てんめえええ！よくも好き勝手言つてくれたなあ！？」

「酷い！背が伸びないのは仕方ないんだもん・・・。千代ちゃんの  
ばかあ！」

「髪を伸ばしてるのは俺の勝手だろ！？」

三人が千代に突っかかる。

「やめる。汚い。睡がどぶ。ついでにわしの半径1m以内に入るな

「このヤロ・・！一発ヤキ入れてやろうつか・・・！？」

柊が拳「パン」を振り上げた時。

柊の後ろ頭に拳骨「ゲンコツ」が落ちてきた。

「そうだ・・！そうだよね・・・。なに落ち込んでたんだろう？

よつし！みんなつ！いくぞおーーッ！」

完璧に立ち直つた咲がきやいきやいと飛び跳ねた。

「これって、ポジティブ・シンキングっていうんじゃないのかな？」  
「いや・・・絶対違うと思うぞ？つーか柊。大丈夫か？哀れだな。

主人公なのに」

「・・・いやみか？それはいやみか？」

「よつしやあああ！死んじゃわない程度に頑張るぞうー！」

あなたの横暴な行動によつて死にそうな人間が一名いるんですけど  
ね・・・。

## 第一十九話・煉獄凶・終組編其弐

その扉を開けてはいけなかつたのかもしれない。

「きつたなーい。蜘蛛の巣とかあるし」「確かに其処は汚かつた。

ホコリにまみれた、赤い絨毯(ジユウタノ)が

不釣り合いなほどに光つて見えた。

「じゃあ、此処から真つ直ぐ進むぞ。

一階を全部みたら一階な」

千代が、先立つて歩き出した。

中は、広いのに無に等しかつた。

食堂には、食器棚はおろかテーブルすら無く  
それぞれの部屋にも、小さなベットがあるだけだった。  
敵も、いない。

「こーゆのつてなんかヤダ。。。びつせなら敵とか出てきて  
ぶつ飛ばすほうがいいんだけどな」

何もないような場所では

不安という感情がより搔き立てられて  
お腹のあたりがむずがゆくなつて  
心臓がばくばくと音をたてる。

「そう?安心じゃん!こうこいつほりが」

麻貴の辞書にはそういう感情が載つてないのか?

「不安とか感じねーの?すげーな。超人だ」

「ちつ・・違うもん!静かな所が好きだけだもん!一生懸命反論してくる麻貴が可愛くて思わず、髪をくしゃりと撫でた。

「わわっ・・・・・」

「あー分かった。柊……麻貴のことがす……「んなわけあるかバ  
力」

咲の言つた言葉をさらつとながす。

流されたのがちょっと悲しくて、咲は柊を一発、（軽く）叩いた。

一階の最後の部屋。

そこは特別扉が重くて、幼女体型の千代には開けられなかつた。

「此處は水晶があるかもしれんな」

その言葉につられて、全員が（麻貴を除く）扉を開けようとする。

「みんな単純だなー。あはは」

「麻貴……おまえ意外に賢いんじやな」

しかし、やつぱりその扉は重く

渋々麻貴が手伝つて、やつと開いた。

「やつた！水晶ゲットだ……」

飛び出した柊の体が、くんつと下に落ちるよひに動いた。  
それは、見間違いではなかつた。

この部屋には、一定の場所にしか床がなかつたのだ。

しかも入つた瞬間に、扉は閉じられ、開かなくなつた。

「くそつ……！<sup>トランプ</sup>畏か！」

唯一浮いていられる千代が、一番軽い麻貴を抱きかかえて  
面積の狭い床に下ろす。

その他は、まあなんとかそれぞれの床に降り立てた。

「千代！てめー嘘つきやがつたな！」

「わしは嘘はついておらん。かもしれない、といつたんじや。  
しかもその証に麻貴は扉を開けようとしなかつたじやない。

この中で麻貴は一番賢いんじやな

「ぐ・・・・・」

やれやれと呆れるように溜息をつく千代に

柊は言い返す言葉もなかつた。

「なあ・・千代。此処からどうしたらだらわれるんだ？」

ちよつとかつこよく着地した音魁が

冷静に物事を判断しようと、思考をめぐらす。

「・・・・・選択肢は三つだ。

壹・此処から真っ逆さまに落ちる。

弐・あの扉をブチ破る。多分無理。

参・このまま餓死か過労死じゃな

「おい・・・それ選択肢つていつのかー?」

なにがなんでも酷すぎる。

もう少し言い返そうと思つて口を開けた柊の視界に  
紫色の煙が入った。

「!?

その煙の中からあらわれたのは、青年男子と女子高生っぽい女。  
格好は、ありそうでない民族衣装に似ている。

金髪でオールバックの髪型。赤くて腰まで伸びているロングヘア。

「ふうーつ。久々のお客様だぜ・・・。丁重におもてなししねえとなあ・・?」

「ばあーか。ひとつとせつちまつよ。あたい面倒なの嫌いだし。  
凛さん。トロトロしてつと文句言つてくつかりよ」

二人は適当な話をちやつちやとすませて、

柊のほうをみた。

「あんたが柊?ふーん。意外と好みかも?」

「お前ら・・・誰だよ」

柊の言葉に、二人は顔を見合わせ、向き直つた。

「俺は凛さんの式狐の一匹。トーチ」

「あたしは同じく式狐のエマ」

呆然としている柊の前で

戦いの火蓋は切つて落とされた。

## 第三十話・煉獄凶・柊組編其参

エマの頬には、赤い絵の具で線が入っていた。  
口元が吊り上がる。

その瞬間

「ばさつとしてんじやないよおー！」

柊のしがみ付いていた床が、エマの拳で叩き割られた。  
その衝撃で、柊は壁に叩きつけられ

真っ逆さまに落ちていこううなのを、音魁が受け止めた。

「大丈夫か」

「あ・・ああ、大丈夫」

音魁は此処に来てから、異様に身体能力が上がっている。

麻貴も咲もそつだが。

でも、一番成長しているのは柊だった。

(こいつ・・壁に叩きつけられても骨ひとつ折れてない・・)

それだけ、柊は成長したみたいだ。

「おい。ルール言つてねーのに動いてんじやねーよ。クソが」

「わりい」

長い髪を手ですいて、ばさばさと顔をふる。

「じゃあ。ルール説明ね。あ、ちなみにデスマッチじゃないから安心して。

制限時間は三十分。その間にあたいらに悲鳴を上げさせたら勝ち。  
かわりに、あんたら全員が悲鳴を上げたら負け。簡単だろ」  
エマは、ピエロが履くよつな靴をじんじんと鳴らして  
不敵な笑みを浮かべた。

「三十分ってのはみじかくねーか？」

「つるつせーな。黙つてろよ。ハゲ」

「ツつーか俺ハゲてねえし」

二人はお互いを見ずに言い争いをして

予告もなしに、飛び出した。

エマが最初に目をつけたのは、咲だった。

「へーえ。あんた綺麗な髪してんじゃーん。あたいウェーブかかってんの大好きー」

「！？」

何時の間にか、咲の隣に降り立つて咲の髪を撫でている。ものすごいスピードだ。

「でも、今そんな事言つてらんないのよねえー」

くくくと喉の奥からおかしな声が聞こえたかと思つて

咲は腹部に重い痛みを感じた。

「きやああ・・・！」

それはエマのパンチだった。

手は小さいのに、威力は大きい。

「はいっ。あんた失格う。おっしまーい。バイバアイ」

咲はそのまま、ぐらりと傾いて奈落の底へ落ちていきそうになつた。

「咲ちや・・・おつとお。てめーは自分の心配してたほうがいいんじゅねーの？チビ

思わず咲に声をかけた麻貴のぐびには

トーチの大きな爪がかかっていた。

「麻貴つ！」

身の危険を感じて、千代が其処から離れる。

「ち・・千代ちゃんの裏切り者〜〜〜！」

「今はそんな漫才をしている場合ではないっ！」

麻貴は小さな体でトーチの手からすり抜け

背後に回つた。

「リウツー！」

トーチに向かつて手を伸ばし、高らかにその名前を呼ぶ。

『<sup>ターゲット</sup>標的は？』

「あいつだよつー！」

そのまま、トーチめがけて手を振る。

ぐあああっと大口を開けたりウが、突進を始める。

そしてトーチの右脇腹に噛み付いた。

「あぐう・・・っ！」

金髪が揺れ、そのまま倒れこんだ・・・かに思えた。

「調子乗つてんじやねえぞクソガキヤアアア！」

脇腹にリウが刺さったまま、麻貴を殺そうと向かってくる。リウで繋がっているので不利だ。

「リウ！ 戻つて！」

「遅いわ！ ボケガキヤア！」

目の前に迫つてくる男が怖くて、麻貴は反射的に目を閉じた。何か聽こえる。

ボクの悲鳴ではない。

じやあ、これは・・・・・。

「があああああ・・・・・！」

「一ノ舞・音<sup>ネオン</sup>音」

麻貴の目に入つてきたのは、叫ぶトーチと椿の花と一緒に舞い踊る音魁だった。

黒髪が揺れる。とても幻想的だった。

「・・・死ね・・・・」

音魁の手中にあつた扇子が、トーチの首の後ろを突く。どさつと音を立てて、トーチは倒れた。

「ふん・・・大丈夫か、麻貴」

「うんっ！ だいじょーぶ！ ありがとね。でも凄いね

自分で作つたんでしょ？ その技」

「頭の中で見えた舞と、聞こえた音を頼りに作つたんだ。自分で作つたものじゃない」

麻貴を抱きかかえて、音魁は咲を助けに行つた。

危うく落ちそうだったので、壁の角に引っかかっていた。

「大丈夫か？ 咲」

「んう・・・あ、音魁。大丈夫よ」

「てゆーかさ、式狐つて守ってくれるんじゃないの？」

「あのクソアマ。嘘ついたんだな」

角に引っかかった咲を助け、ひとつの中床に降り立った。

「あとは、柊だけだな」

「・・・そうね」

「頑張って！柊くんッ」

三人がエールを送っている中で

柊は千代の援助を貰い、戦っていた。

「あたいはトーチみたく甘くないんでねえ。感情的にはならないのさ！」

ロングスカートを履いているとは思えないしなやかな動き。

上半身は、胸だけを布で覆っている。

格好的には難しいと思われる手と足で繰り出す物理的な一直線攻撃。それが出来るという事は、相当の力を持っているはず。

だが、隙ができれば・・・勝てる！

「柊。技を使え」

「え？」

「お主、自分の技を作っているじゃね？？」

素敵な笑みを浮かべた千代は

柊の肩から離れた。

「いけ。お主ならできよう」

「わかつてゐつての！行くぜ！バカ狐！」

## 第三十一話・煉獄凶・柊組其四

勝てる。

自分を信じて。

大きく息を吸い込んだ。

肺に空気が入つて、満たされていく。

「よつしゃ！ いくぞつ」

「ハツ！ 出来るもんならやつてみな！」

柊は左足を軸に前へ飛び出した。

エマを両掛けで握った拳を押し出すが早い動きで背後に回られてしまつ。

「くそつ！」

加速したままだが

足元にあつた小さな床に着地し、身を屈めて飛んできたパンチを避ける。

そのパンチは、柊が着地していた床に急降下し床は、圧力で叩き割られた。

柊は先を見切つて、0・の速さで次の床へとジャンプした。

「ちい・すばしつこいねえ」

（あたいを疲れさせるつもりか！？ そつはいくか！）

「てめーなんかに殴られたかねーんだよつ！」

（にしても時間がだけが過ぎていく・・・どうにかしねーと...）

バキイ！

鈍い音がして、二人の拳がぶつかり合つた。どちらも、拳から赤い線が流れる。血だ。

「柊！ なぜ技を使わんのじや！」

「つるせー！ 使うタイミングがねーんだつての！」

空中で何度も宙返りをし、両者同じよつたタイミングで足をつけた。  
(・・・今なら出来るかもしんねえ！)

柊は両の手を大きく広げた。

そのまま右手だけを宙に掲げ、左手を下ろす。

「？・・・何をする気だ？」

掲げた右手で、何かを掴むように十字を切った。

そしてその手を下ろすと、柊の足元に風が集まつた。

ゴウゴウとうねりをあげて。

「一風・五十嵐」  
イチフウ イガラシ

柊が言葉を発したとたん、その風は

エマめがけて竜巻のように突進した。

「くだらないね！玉碎ヒムクサイしてやる！」

強氣で風を睨んだが

その風は力を弱めることなく進んでくる。

「えつ・・・」

やばい。

このままじや、確実に死ぬ。

だが、もつ遅かった。

竜巻は、Hマを取り囮み、襲ってきた。

「いやあああああああーーーー！」

ふつ。

もう一度、柊が十字を切ると竜巻は消えた。

「や・・・やつたね！柊くんっつ！」

嬉しさのあまりぴょーんと飛び跳ねた麻貴の顔に  
ぽかつと何かが当たつた。

それは、緋色に輝く水晶玉。

「ありり？」

「あたいらが負けたからね。もつていきな！」

声がするほうをみると、さつき倒したはずのエマヒートーチが無傷で立っていた。

柊と音魁が構える。

「そんなにあせんなつて！俺ら負けたから、手出しひはしねーよ」

「だいたい凛さんはあめーよ。此処で水晶渡せだなんて！」

腰に手を当てたエマは、心底呆れ顔だった。

「でも、久々に楽しめたよ！あんがとな」

呆れ顔が笑顔に変わり、ぱちんとウインクをした。

それはそれは、美人で素敵に見えた。

「咲もあれくらいだつたらな・・」

「どーゆー意味よ！？」

「いいじやん。水晶手に入つたよ？」

「バカは放つておけ。麻貴」

「じゃ、あたいらは消えるね。この宮殿でたら、すぐに凛さんのところにいけるよ！」

そういうて、二人はテレポートするように消えた。

そしてその言葉通り行くと、もとの世界に足を踏み入れる事ができた。

「おう！お疲れさん！どーだつた？ 楽勝っしょ？」

「まーな

柊の言葉に、三人は顔を見合させ、くすっと笑った。

「ほかのみんなは？」

「もうとっくに帰つてきますー。あんたら待ちきれなくて帰つちやつたよ」

「薄情なやつらだ」

なにはともあれ、柊たちは無事に帰つてこられたのだ。

次話は、少し時間をサカノボ遡る。

## 第二十一話・「修行、終了!」

四ルートに分かれた守護組は、それぞれの道を走っていた。

「なんもない・・つまんねーの」

蘭は道無き道をとこと前に進み  
どうにか水晶と出口を探していた。

蘭は手に聞機を持って、口に近づけた。

「こまま行つても行き止まりかもしれない」

『かもしれないでしょ。とにかく行き止まりまで行つてちょうどだい』

聞機の中からやけに冷ややかな蔭の声が聞こえた。

それがそこら中に響く。

「・・・わかったよ」

聞機を懐に閉まって

再び歩き出そうとしたとき

頭上に、何かが飛んできた。

「きやあっ！」

びっくりして、思わず甲高い声を上げてしまった。

それは、小さな蝙蝠コウモリだった。

「びび・・・びっくりしたつ・・・」

頭を抑えて、自分の頭上を馬鹿にしたように飛ぶ蝙蝠を眺めていたが  
自分の女みたいな甲高い声に、蘭は顔を赤くした。

「俺は男なんだから！こんなことでいちいちビックりらんねーの…」

小声でそう自分に言い聞かせ

気を取り直してまた前に進み始めた。

（聞機の電波受信棒立てとかなくてよかつた…。誰も聞いてない  
よな・・?）

「おひあー。」

こつちは綺麗に舗装された洞窟。

その中を、秦が駆け抜けていく。

たくさんの妖に、銀色に光る小太刀を振り回し  
一匹ずつ、正確に狩つていく。

「くつそー！無駄に妖多いんだっての！」

お世辞でも広いとは言えない洞窟の中に

嫌というほど妖がいたら、誰だつて愚痴くらい零すだらう。  
いないもいないで、考え方かもしれないが。

「おい煩！そつちどうだ！？」

耳に当てた聞機から声が返つてくる。

『え？特に。なんも無しだよ。樂チン～』

ずいぶんと飄々（ヒヨウヒヨウ）とした煩の声に  
思わず聞機を壊したくなつた。

「ちいっ！煩！出口見えたのか？」

『あ・・・それはまだ。でもずっと先に明るい光がちょこつとみえ・  
・』

「それだ！早く走れ！水晶があるかもしけねえ！急げ

『え～・・・』

「とつとといけつ！～！」

煩のたらたらぶりに、秦は心なしか大きな声が出た。  
聞機の中から「うるさいよお～」と帰つてくる。

が、秦はそれを無視して、ぶちんと電波受信棒をきつた。  
洞窟の中に、駆けていく足音と影だけが残り、映つた。

「まつたくう・・。乱暴だなあ。秦は」

怒り氣味に命令された煩は、仕方なく駆け足で走り出した。

「此處走りにくいんだもん・・・」

この洞窟は全てが階段になつていて

ずっと走り続けているのは、体力的につい。

「秦の鬼ー。悪魔ー。冷血ー。あんぽんたーん。えーっと・・」

思いつく悪口を立て続けに並べたが

秦からの返事が無いので、飽きてやめた。

いつもならすぐに反抗してくるくせに。

きっと今は闇機の電波受信棒を切っちゃったんだろう。

そんな事を思いながらとてとてと歩いていると

光が目の前に来た。

「え・・・わっ！ やつた！ で・・でも疲れたあ・・。

やつぱ悪口言つてたのが体力消費しちゃつたんかな・・」

煩はその場で、がくりと膝から落ちた。

階段に手をつき、肩を上下させ

荒い呼吸を繰り返す。

「はあ・・・はあ・・・・・つ。・・・・？」

煩は目の前の光景に目を見開いた。

「嘘でしょ・・・・・！ ちよつ・・蘭！ 秦！ 蔭！ 聽こえる・・・！」

？」

「聴こえるわよ。大声出さないで」

煩の問いに真っ先に応えたのが蔭だった。

長い髪は左右にはたはたと素敵に流れ

かつんかつんと音を響かせて、歩いていた。

「ねえ。他の二人には繋がんないの？」

『うん！ 出てくれたの蔭だけ』

「つたく・・・あいつら受信棒きりやがったな」

ちつと、蔭が短く舌打ちをする。

『そんな事より大変なの！ あのね・・・うわっ』

ザザザツ！ ガガガッ！

おかしな機械音がして、煩の声がぶつりと途絶えた。

「ちょ・・煩！ 大丈夫なの！ ？ 返事しなさい！ 煩つ

『その声・・・蔭だな？』

蔭は帰つてきた声に目を見開いた。

その声は、他の誰でもない、自分の上官の声だった。

「ざ・・・・・斬様・・・・・? どうしてっ・・・?」

『俺もわかんねえんだ。』『いつが穴から転がり出でてきやがった』

蔭の顔が青ざめるように、心配の色に変わる。

自分の上官は人情が全くといっていいほど無い。

其処にいるのがもし煩だけだったら、煩は妖と同等に

間違いなく殺されるだろう。

蔭は聞機を耳に押し付け固定し、ものすゞースペードで走り出した。

『・・おい蔭。聞いてんのか?』

「も・・もうしわけありません!あの・・お一人なのですか・・?」

『なわけねえだろ。他のやつらもいる』

ほつと安堵の表情を浮かべ

蔭は、速度を少し緩めた。

『とにかく、てめえも走れ。穴は四つだ。道なりに行きや、出れるはずだ』

「はい!」

そこで斬の声も切れた。

蔭はこのことを報告しようと、秦と蘭の聞機あてに話しかけるが  
応えは帰つてこなかつた。

「くそつ・・・・仕方ない・・・私だけでもこのままいかなくちゃ」

此処に長時間いるのは危険だ。

本能がそう伝えてる。

鈍く頭が回転している中で、一点の光が見えた。

あれは・・・きっと穴だ。

蔭は両手を大きく広げ、まるでツバサで飛ぶかのように地を蹴り、進んだ。

「斬様ツ!」

暗闇から出で、真つ先に斬の姿を見つけると  
其処に降り立つかのように、足元に駆け寄つた。

片方の手は地に着け、もう片方の手は、立てた片方の膝の上に乗せる。

もう片方の膝は、手と同様地に着けた。

「おそかつたじゅねえか」

「申し訳ありません！お許しを」

「陰は頭「かぶ」を深く垂れた。

「ふん。まあいい。水晶も手に入つたしな。あとの奴らが来たらかえんぞ」

「はっ！」

そして十分後、無表情で入ってきた秦が驚きの表情に顔を変えすぐさま庵の元へ駆け寄った。

そのすぐ後に、蘭もやってきて

「え？え？なんでなんで？全員いるの？」  
と、ほんとに困り果てた顔を見せた。

「おつかれりいつ！」

帰りは、天心甘栗を頬いつぱいに詰め込んだ  
なんとも言いようのない凛がむかえでた。

「大変だつた？」

「まあな。といひであいつらは？」

庵が自分の髪を手ですきながら言つた。

「まーだ！でも、もうすぐ！」

凛の言葉は嘘ではなかつた。

「修行、終了！」

## 第三十二話・操り人形

「結局！式狐は役に立たなかつたじゃねーか！しかも俺らを攻撃してくるしッ！」

柊はぼてつと床に寝転んだ。

ちょっと久しぶりに思える赤い絨毯。気持ちいい。

「あ～ら、油断は禁物よ。攻撃しないなんて言つてないしい～」

なんとも憎たらしい声で、凛が反撃した。

ぬぐぬぐっとぐぐもつた声が、柊の喉から聞こえる。

「にしても、よく凛様にそんな口利けるわねえ」

部屋の隅に、守護組は固まつて話をしながら時折柊を見ていった。

「ほんとじや。成長しなくてわしも困つておるのじや」

「凛様つてそんなに凄いの？」

輪の中に入つていた麻貴がふと思つて聞く。

隣にいた咲も、確かに、と頷いた。

「凄いのつて・・・凄いにきまつてんじやない！」

蔭が声を荒げる。

「いーー？ここに居る五大神は、神々の主神なの！頂点に立つてんの！分かる？」

「う・・・・・うん」

麻貴が、蔭の迫力にびっくりして、声を小さくする。

「蔭。<sup>ウルサ</sup>声が大きいぞ」

「五月蠅いわね。仕方ないじゃない」

床に座つたまま、壁にもたれかかっている秦を見る。見るというより、睨んだ。

「凄いのは分かつたけど、なんか凛さんじゃ想像できない・・・咲が凛を見た。

柊と口げんかをして、ついにその辺にあつたクッショソンまでもを

投げている。

咲はちよつと苦笑いした。

「じゃあ斬様ならわかるでしょ、ついでに」

その苦笑いの咲に、蔭は胸に手を当てて血饅するよいつ  
誇らしげに言つた。

「はあ！？絶対庵様だろ！？」

「違う違う！ 湾様だつ！」

「やっぱ満様でしょ。」「こは」

「わんわんざやんざやん」と言い始めたので

咲と麻貴は顔を合わせて、また苦笑いをした。

「というか、その、小夜とかいつお姫様を助けなくていいのか？」  
凛の傍で、時折柊vs凛の被害を受けながら、音魁は問うた。

「あつ！忘れてた！」

「オイ！お前大丈夫か！？」

「よつし！水晶集まつたからもうつ出发しちゃう！」

「ちよちよちよつと待て！いきなり！？もうー？そんなのあり  
「あり。なんでもあり。だって小説だもん。漫画じゃないもん  
どつこいつ理屈だよ！」

こんなギヤグ染みた会話を、遠くから庵が見ていた。

「くだらない・・・」

早く行かなれば。

何か嫌な予感がする。

何か、取り返しの付かない事が起つそつな気がする・・・。

周りを黒雲で囲まれた、ひとつの中城。  
なかはひつそりと静かだった。

ひとつのはすり泣きが響く以外は。

「出して・・・出して・・・此処から・・・出してよ・・・」

大きな牢の中ですすり泣く少女。

「怖い・・・怖いよ・・・助けて・・・助けて・・・」

肩を震わせて泣く少女が入つていて牢を、

豚の形をした妖が壊さんばかりに叩く。

「うるせえな！ 黙つてろ！」

「ひいっ・・・・」

少女はそいつから離れるように、後ずさりする。

「そんなに乱暴に扱っちゃいけないよ」

そんな優しい言葉が少女の耳に唐突に入り込んできた。

その瞬間、妖は肉の塊カタマレに変化し

どしゃどしゃと嫌な音を立てて、その場に落ちた。

「あ・・・ああ・・・・」

がたがたと手が震えて声も出ない。

「ゴメンね。怖い思いさせたね」

妖を殺した男・冥堂・は、牢の中の少女・小夜・に小ちく語りかけた。

「嫌ッ！ 来ないで！ いやああ！ ひいっ・・・・！」

小夜は自分の頭の上におかれたりの手を必死で振り払おうとする。精神はもうなくなつたかのように、闇雲に手と頭を振る。

顔はやせこけ、骨と皮しかないような手。

着ていた綺麗な着物は、ホコリにまみれて、高価なものとは思えない。

「嫌ア・・・もう嫌・・帰して・・帰りたい・・」

「ダメだよ。全く、お姫様つてのはどうしてこう我が儘なのかな・・?

そういうて、小夜の小さな頭を鷲づかみにして、持ち上げた。

爪と手がギリギリと食い込む。

頭がそのまま潰されそうになる。

「あがあ・・・！・・」・・ゴメンなさいっ・・許してえ・・」

「セツだよ。キミは僕に逆らひつけないで」

「はい・・・はい・・・つ・・。ゴメンなさい。

何かの暗示にかけられたようだ。少女は必死で謝る。

卷之三

壊れかけた操り人形のような少女を  
柊達は救えるのか・・・・・

## 第三十四話・鬼退治

「でも、行く前に居場所を特定しなくつちやー。」

凛は、思い出したように立ち上がった。

赤く淡く、薄い羽衣ハヤロブがコラコラと揺れる。

そして、乱暴に大きな箱を持ち出し、中を「じんじん」とあわつ出した。

「おい・・・なにしてんだ?」

「ん?だから、居場所を特定しようと思つてッ」

大きな板に、薄い薄い墨で地図が書かれてある。

これに、凛は自分の手を翳カザした。

ほかの五大神や守護たちが、引き寄せられるように集まつてくる。

「我に力を与えよ、聖域の土地男。我らが敵、冥堂の真の居場所を全てを悉く碎く光で示せ」

静かに重い声で、詠唱する。

すると、その手に一本の光が差し、照らすように輝いた。

「土地男・・・?」

「聖域に住んでいると言われる大男だ。  
居場所を特定する術を持っている」

麻貴の疑問に、秦が小声で答えた。

「・・・ヤバイ・・・ヤバイヤバイヤバイ

凛の顔が一気に青ざめた。

翳していた手をぱつと離す。

「おい・・・どこだ」

斬がもつたいぶつた凛の態度にイラついて机を叩く。

「・・・あのね・・・輪廻の森・・・」

そこは入ることの許されないただただ深い森。

其処に入ってしまえば、神だろうがなんだろうが、一度と出でこられない。

しかも、死んで樂になる事すら許されない。

そんなところから、冥堂はこの地に飛んできたといつのか。

「あいつは昔つから地理に強かつたもんな」

「住めるのも頷けるが、俺らが其処に行くのは到底不可能だりうへ。湾と満がなにやらしきりに頷いている。

「じゃーさ！ 桧たちに行かせりや済むことじゃん？」

「お前ふざけてるのか？ ふざけてんだな？ この一大事に？ あ？ 何とか言え！」

「はい・・・すいません・・・。ふざけてました」

どうやら凛を本気で制する事が出来るのは、満のようだ。

・・・・・怖いが。

「もたもたしてんじやねーよ。俺はもう行くからな」なかなかまとまらない話し合いに、斬は苛立ちを覚えた。

早く行つて

敵を切つて

斬つて斬つて斬つて斬つて

それが自分の唯一の快楽。

「もーッ！ 斬が急かすからあたしまで行く羽目になつたじゃーん！」

自分は危険地帯に乗り込まないつもりだつたらしい。

凛が腰に手をあてて、頬を膨らませた。

もう分かっていると思うが、あまり可愛くは無い。

五大神は、話が付いたので

眠っていた守護の煩に雷雲を用意させた。

「もう行くのか？」

改めて戦闘衣装に身を包んだ桧が、煩に聞く。

「多分。凛様が用意しろと言つたので」

今まで寝ていた煩の頭には、寝癖が付いていた。白い髪の上のほうに、ちゃんと立つた髪の毛。

それはまるで、猫耳のようだった。

「おい・・・お前寝癖が・・・」

「ふえい？あ、ほんとーだ」

何度も手で直そうとするが直らなかつた。

「もういいや。これで」

そのうち、煩はあきらめてしまった。

そして、寝癖の事なんかもう忘れたといつよつこ

煩の体が南へすつと向いた。

「来い」

大きくて丸い目を細くして、水晶玉がロザリオと共に手甲に付いているほうの

手を、北へ向けた。

遠くで疾風<sup>シップウ</sup>が巻き起こるのが見える。

と、疾風が見えた瞬間、大きな広間の中に、一匹の巨大な猫が現れた。

毛並みは黄色と薄く白が混ざつていて。

足の四本には全て、雷雲が巻きついたようにある。

『我を呼んだか・・・何百年ぶりだろうかな、煩』

『えへへッ。だつてこの百年間くらい穢やかだつたけど  
凛様の力の持ち主も発見されたり、冥堂<sup>メイタウ</sup>にもあつたし。  
この頃色々大変なんだー。だからや、銘銘<sup>メイメイ</sup>。雷雲<sup>ライウン</sup>布頬むよ』

銘銘と呼ばれた猫ははあと溜息をついた。

『これだから我の主は・・・・・』

『こんな僕がいて、銘銘がいて、丁度いいのー』

ね？と笑つて、煩はウインクしてを見せた。

『仕方あるまい』

渋々承知した銘銘は、ふつとテレポートのように外に出て天高くを見上げた。

青い空が見る見るうちに、黒雲に変わつていく。  
そして雷がバリバリと降つてきた。

「きやあ！」

咲は驚いて、隣にいた柊にしがみ付いた。

二回目の事だから慣れたし、なにより猫に見入つていた。

「ありがとー。銘銘ツ！」

煩がぺこりと頭を下げる。

『簡単な事だ。礼などいらん』

自分より遙かに大きな化け猫に抱きつくと、

煩は銘銘に飛び乗つた。

「俺らはこっちか・・？」

柊が大きな黒雲を見る。

「銘銘は煩以外を背中に乗せるのを嫌うのじや。  
頑なに拒まれるぞ」

「これは守護の中で煩にしか使えない技よ。

この点だけで見れば、煩はずば抜けてエリートね」

凛がちよつと補足した。

「じゃ、行こうかー鬼の首を取りにー！」

## 第三十五話・闇ルートへの入口

雷雲布は思ったよりふわふわしていたが、すぱりと落ちるような欠陥品でもなかつた。

「私雲に乗るのが夢だつたのーっ」

なんとも子供染みた咲の夢だが

柊はあえてつつこまなかつた。

前をいく煩は特徴のある少し長めの耳を頬りに輪廻の森を探していった。

『あつたか?』

「うーん」

きょろきょろとあたりを見回す。

ただつぴろい森ばかりで、柊たちには見分けが付かない。御殿はもう見えなくなつていて。

「あーっ! あつたあつたありました!」

突然に煩が叫ぶ。

その指差す方向には、やつぱりただの森。

「ただの森ではないのか?」

「やだ音魁。分かんないの? 此処・・・「此処、妖氣が激しい・・・

!-!-!

音魁は凛に訊ねたが、その言葉をさえぎり

柊が大声をあげた。

此処、おかしい。

こんなところに居られない。

飲み込まれる。

飲み込まれそうだ。

この汚い気に。

「でも柊、凄いわね。氣づくの早い」

凛が惜しみない拍手を送る。

『私は此処には入れん。』こんな主を送り出すのは心配だが……輪廻の森の真上にたつて、大きな城を見下ろしていた銘銘が心配そうに呟いた。

天守閣に聳える、悪魔の姿を模つた象が金箔の所為か、まぶしく見える。

「もう！銘銘は心配性だなつ！」

『我的力はこの中では一切つかえん。だからせめて……』銘銘は、躊躇<sup>タメラ</sup>つようにして、煩を自分の背からだけ、雷雲布へと移した。

『この邪魔な外部だけでも、壊しておくれ……』

稻妻が走った。

縦横無尽<sup>スルミ</sup>に城を田掛け、轟きながら雷鳴を鳴らす。

咲が今度は、隣に居た凛に抱きついた。

『フン。こんなものか。では氣をつけるのだぞ、主』最後の最後まで煩を心配して、銘銘は闇へと溶けた。

「……ありがと。銘銘。絶対無事で帰つてくるから、心配しないで・

・・

心配性のキミを、困らせるわけにはいかないから・・・。

外壁も、天守閣も壊れたが  
中から何一つ見つからない。

「こりや・・・地下だな」

湾がめんどくさそうに息を吐く。

地に降り立つた一同は、隅々まで中を調べたが、何も無かつた。

『地下への入り口を、探さなければいけないという事ですか？』

湾の傍らにいた蘭が散らばつた破片を見つめ、踏み潰しながら言った。

破片はもろく、すぐにぼろぼろになつた。

(・・・これは、ダミーか？・・・)

蘭が他のものも踏んでみる。

何もかもがもろかった。

「湾様。これはダミーでは無いでしょ？」「足元に崩れた破片をかき集め、蘭が掌に乗せてみんなに見えるように持ち上げる。

「そうだな、とすると「地下への入り口はわかつてゐるわ！」

突然凛が口を開いた。

ちよつとかつこつけてもたれ掛かっている。

それは、大きな鉄扉テッピだった。

「これが？」

斬が鉄扉を見る。

「そーよ！だつてほら、階段があるもの」

ぎさぎさぎと古い音で鉄扉が開く。

中には、無駄に長い階段があつた。

「行くしかねーな」

一同は、暗闇の中へ一歩ずつ降りていった。

暗闇には篝火カガリビが照らされていた。

しかし妖は何処にもおらず、まさに「ウェルカム」状態だった。階段は延々と続き、時に足を滑らせながら一同は下へ下へと降りていった。

そして、やつと階段がなくなつた頃。

「あ！」

咲が叫び、一步退いた。

其処には夥しい数の妖が待ち受けていた。大きなものや小さいもの。姿形は様々だ。

そして奴らが守っているのは、これまた鉄扉だつた。きっとその向こうに、囚われの姫が嘆きながら助けを求めているはずだ。

「どけつ！」

水晶を振りかざして、柊が叫ぶ。

「五十嵐！」

柊の手から、突風が巻き起こる。

そして周りにいた奴らを跳ね除け、鉄扉に手を滑り込ませた。そのまま鉄扉を開こうとするが、また妖が襲つてくる。

「どきなさいよおーつ！」

後ろから大きな声が響く。

髪を振り乱した咲が、鬼のような形相でこちらを見ている。

「え？」

「どけつて言つてんのよつ！バカ柊ッ！」

それを言つやいなや、咲の髪が鋭い矛となつて飛んできた。爆発音に近い音が広い地下の隅々まで響き、反響してくる。

「行くわよー柊っ」

「お・・・おう」

その後に麻貴と音魁もつづいた。

が、凛たち神は入れなかつた。

「結界かー。小さかしいマネしてくれるわ。よし千代ー！あんたはあいつらについて！」

「ええ！？私・・・入れない・・・「いいからー早くー結界解除したらあたしらもいく！」

半ば無理やりに、千代は結界の向こうへ押し込まれた。むぎゅやうっと変な声が聞こえる。

「千代！行くぞっ」

千代は、終の後を急ぐように追つた。

まるで実験室だつた。

コンクリートで固められたような部屋が「1・A」「2・F」などと並べられている。

「一部屋ずつまわる？」

麻貴の提案でみんなが同意し、一部屋ずつ順番に回ることとした。

どの部屋もおかしなところばかりで

人一人もいないのに、実験器具が所狭しと並べられていた。

「へーんなの」

咲が器具をいじりながら、あたりを見回した。

そして防犯のカメラがあることに気づく。

「壊しこっか」

がしゃんと音を立てて、わずか0・07秒でカメラが崩れる。

「私達が来た事はもう向こうは知ってるっぽいね。

でも攻撃してこないわ？なんでだろ？」

柊達は慎重に回ることを考え、すぐにその部屋を出た。

「・・・・・フフフ。やつと来たんだ」

奥では、悪魔が嬉しそうに笑う声だけが、聞こえた。  
そして囚われの姫は、まだ牢の中に、閉じこめられていたのだ。

## 第三十七話・隨ひた姫

真っ直ぐに歩くと行き止まり。

「どーするよ」

「真っ直ぐ行くしかないでしょ」

「しかし行き止まりだ」

「でも他に方法ないよ」

「真っ直ぐでいいじゃろ」

五人は行き止まりの壁を見つめて話し合っていた。  
一見何もなさそうなただの壁。

と、五人とも思っていた。

「つたくよー。俺こーゆー迷路とか苦手なんだよなあ」「ぶつぶつとなにか言いながら、柊が壁にもたれかかる。

もたれかかったと思った瞬間、くるりと反転し、後ろへ倒れた。

「スイッチがあつたんじやな」

「ま・・・マジでか・・・」

「ごてんと倒れた柊が、頭を抑えてきょろきょろとあたりを見回す。すると

「あ・・・あれって」

咲の驚きの声が頭の上から降ってきた。

「小夜・・・姫・・?」

セミロングで、ブリーチされた栗色の髪。  
フリルがついた、ピンク色の素敵なドレス。

「だ・・・れ・・?」

とても日本の姫には見えないが、この子を見たことがある。

小夜だ。

「小夜様・・ツ」

顔はやつれて、手もボロボロ。髪はぐしゃぐしゃと乱れ、もう何ヶ月もお風呂に入っていないみたいだ。

「あなた・・・千代・・?」

「ええ！ 私めは千代にござります！」

千代は小夜が監禁されている牢をがしゃがしゃと鳴らした。

「わ・・・私・・・貴方の・・・姉なの・・・」

唐突に小夜が、千代の姉であることを暴露した。

これには柊たちも驚いた。

しかし一番驚いたのは、やはり千代であつて

「え・・・？」

「ゴメンなさい。私なんかより、貴方のほうが王家に相応しいわ<sup>フサワ</sup>」

ぽろぽろと涙を零しながら、小夜は泣き崩れる。

「私・・・あの生活がイヤでイヤで・・だから・・・冥<sup>ミツ</sup>堂の甘言に乗

せられちゃつて・・」

これはアレだ。よく姫様にある豪邸の暮らしがイヤつてやつだ。その気持ちは、柊たちには到底わからない。

「だから・・・だから・・・」

「もういいですよ、姫様。悪いのは奴です。さ、もう帰りましょ

千代の優しい言葉に、はっと顔を上げた小夜の顔が歓喜の表情に変わる。

「ありがとう・・・千代・・ツ・・。わたし・・・わたし・・・」

その時、一瞬怪しげな笑みを浮べたのを、柊は見逃さなかった。

「逃げろ！ 千代――――つ！」

腹部に重い痛みが走った。

なんだこれは

熱い液体が、腹部から赤黒く落ちていく。

え？

これは何？

痛い。それに何か腹に突き刺さっている？

それは・・・・・

「私これで、迷い無く貴方を殺せるわ」

柊たちの皿に映つたのは

小夜の細い腕が、千代の腹部を深々と貫いている

まさに裏切りに近い形だった。

「千代おおおおおおおおおー————ツ—————！」

これが夢だったらいいのに。

その悪いのは、いけない」となのですか・・・・?

千代おおおーッ！

大量の血が滴り、肉が抉られた。

千代はひぐにとも動かない

年代の体に深々と自分の腕を刺し

「他の体に泥漿と自分の肌を束しかまえ  
少佐は高らかに笑う

ま、たぐ、…簡単に騙されちゃうで！私はね、もう立派な冥堂

様の部下なのよ！

だけど

なんであんなに文句ばかり言つてたのか。。。私もバカだつたわね。

あの頃は

すふりと千代の体から腕を抜いた。

ପରିବହନ ଓ କ୍ଷେତ୍ର ପାଠ୍ୟ ମାଧ୍ୟମରେ ଜୀବନରେ ଆବଶ୍ୟକ

「…取引しない?」

「え？」

小夜は其処から動くことなく、千代の小さな体を尻目に高々と言い放つた。

「その子をこっちは渡して。そしたらあなたたちは無傷で帰してあげる」

柊が応えた。

小夜の眉がぴくりと動く。眉間にしわが刻まれた。

そして、その細い手が何かを操るようにくいくいと動く。

瞬間、小夜の後ろにはすでに死んでいる人間が並べられていた。

「なつ・・・!?

咲がその人間を睨みつける。

「人間傀儡。ニシゲンクガツ私の力よ」

「酷い・・・・・・・・・・」

確かにそれは酷かった。生身の人間に無理やり針を突き刺しているようだった。

「あらどうして? こいつらは死んだ人間よ。生きてるわけじゃないわ」

くすりと怪しく笑うと、右手を振り上げ薬指と親指を上下に振った。最前列にいたおだんご頭の中国人の少女が大きな日本刀を振り回しながら

柊たちに迫ってきた。

「この子はね、人身売買の取引に使われそうになつたの。でもそれは行われなかつた。なぜか? それはこの子が取引の人間を全て殺しちやつたからよ!」

その少女は小夜に操られるがまま、柊たちに闇雲に突っ込み切り傷を負わせていく。

「そのあとこの子は考えたわ。ああ、私は何故生きているのか。ケガ穢れない無垢な少女でいたかつたのに。

そしてその子はどうしたと思う? • • • • • 自害したのよ! 自分の喉笛を切り裂いて!」

柊は小夜の笑い声に耳を貸さず、その少女を止めようと手を翳した。麻貴がチーンを握る。リウの眼が真紅になつた。

咲の髪は先ほどから大きく乱れ、怒りで我を忘れそうになるのを必死に止めていた。

音魁は千代の腹にできた穴を自分の造つた治癒の技でどうにか直そ

うと

止血をしていた。

「・・・・・私の話、聞いてた？」

小夜の機嫌が悪くなる。

それは、柊がぱりぱり無視していたからだ。

「聞きなさいよお！――！」

きゅん。

風を切る音が聞こえた。

小夜の表情が固まる。

「俺、人の話聞くの、苦手なんだよねえ」

「で、なんだつて？」

小夜の顔が、醜くゆがんだ。

### 第三十九話・心を保つた傀儡の少女

小夜が大きく手を揺すつた。

傀儡はみな後ずさりし、小夜も消えるように下がつた。  
と、思われた。

「！」

音魁の腕の中にいたはずの千代が忽然と消えている。

「千代・・・・！？」

「この子は冥堂様の実験体にさせて貰うわね。無駄な努力、ぐる  
ーさま」

その場から動けなくて悔しそうにしている柊たちを、  
面白くて面白くて仕方ないという様子で、小夜はまた笑つた。

「・・・・千代・・・・」

その場にぐくりと崩れ落ちた。

何故こんな事になつたのだ。

「千代ッ・・・・」

何故だ何故だ何故だ！？

柊は自分の頭を壁に打ち付けた。  
額が割れる。血が流れる。  
かまわない。

「千代お・・・・・」

なくしたくなかった。

当然のむくいだ。

「何でだよ・・・・・」

大切な仲間だつたのに。

すべての始まりは、あいつからだつたんだ。

泣き崩れる四人の傍に、傀儡がひとつ転がつていた。

それは先ほどの中国人系の少女だった。

泣かナイでクダサイ……………

「え？」

アナタ達の仲間は、まだ取り戻せマス

「だ・・・誰？」

麻貴があたりを見回した。

目に留まつたのは、転がつてゐる傀儡。

「キミ・・・・？」

ハイ。あたいはリーメイ

少女は答えを返してきた。

「キミは・・・・小夜の部下じゃないの・・・・？」

イイエ。強制デス。でもあたいは・・・自分の心を信じてタカラ・

・  
「そつか、強いんだね」

リーメイの表情は変わらないが、声が嬉しそうに笑つた。

滅相もナイ。・・・そうだ、あたいの首の後ろの金具、トッテいただけマスカ？

麻貴は恐る恐るリーメイに近づき、首の後ろにあつた金具を抜き取つた。

とたんに、命が吹き込まれたようにリーメイが起き上がつた。

「ありがとうござえマス！これであたいも自由でス！」

起き上がつたリーメイは、何度も何度も麻貴に頭を下げた。それを見ていた柊たちが、集まる。

「お礼に、アナタたちの仲間サン助けます。協力させてクダサイ！」  
頭の髪飾りが、しゃらりとなつた。  
その音で、千代の簪を思い出した。

「わかつた。一緒に千代を助けてくれるか……？」

「ちがうなんじゃせえマスッ――――」

リーメイが、日本刀を持ち直し、笑つた。

## 第四十話・籠と鳥

四人とリーメイは歩き出した。

この地下の地形に詳しいリーメイが、四人を先導した。

「おい・・・おい柊！」

小声で、音魁が柊を呼び止める。

「なんだ？」

「あの女。ホントに入れてよかつたのか？もしかしたら小夜の手下かもしれないぞ」

それはありうる事態だった。

もしかしたらリーメイは芝居をしているだけで、  
本当は小夜の命令でこんな事をやつているかもしれない。  
でも

「大丈夫。きっと大丈夫」

音魁に言い聞かせるように、自分に言い聞かせるように、柊は断言  
した。

「それにさ、もしそんな事があつたら、俺があの子を倒すから」

迷いは無い。

迷つてなんかいられない。

進まなくつちや。一步でも先を日指して、光を日指して。  
迷いは、無い。

鳥になりたいと思つた。

そこはまるで籠カゴだつた。

大きな大きな、籠。

そこから出る事は許されず、結婚相手も決まつていて、

何一つ自由が得られない束縛の空間。

出たかった。

自由が欲しかった。

どう足<sup>アガ</sup>搔いても、変わらない運命。

だけど

「一緒に来ませんか？お姫様」

その一言が、私の世界を、私を変えた。

此処から出たい。籠の外へ。自由になりたい。

あの青い空を優雅に、自由に弧を描いて飛ぶ、あの鳥のよう。

あの人全てを変えた。

あの人があなたを助けてくれた。

だから私は決めたんだ。

あの人、力になると……。

「はあ・・・はあツ・・・」

暗い畳の部屋に、荒く息をする声とぱたぱたと走る音が聞こえる。  
襖を開けては閉め、暗証番号を打ち込んでいく。

「つぐ・・・はあ・・・はああ・・・」

肩を大きく上下させる。

片手には小さな少女を抱えて。

そのうち死んでしまうかと思つたが、あの髪の長い少年の治癒で  
みるみるうちに傷口からの出血は止まった。

「つ・・・七・・・七・・・一・・・」

最後の暗証番号を、正確に、いち早く打ち込む。

襖の音とは思えない「がしゃ」と金属が擦れるような音がして  
その襖は開いた。

中はまるで実験室のようだつた。

蛇やモルモットが宙ぶらりんに吊るされ、

「こぼこぼ」と不思議な音をたてるガラス瓶の中には、小さな犬が押し込められていた。

「冥堂様！」

その奇怪な空間の中に、そいつはいた。

右目だけを、長い髪で覆い、ただただ黒い羽織を肩に適当にぶら下げていた。

「お帰り・・・小夜。どうだつた」

「は・・はい。手に入れました・・・」

手を差し出す。

「輪廻の少女です」

その言葉を聴いた瞬間、冥堂の口が大きくにたつと笑つた。

愛おしそうに、千代の髪を撫でる。

「会いたかつたよ・・・僕の力は・・・きつといの中に・・・」

ばしゃん！

はねる水音がした。

千代が、大きな水槽に投げ入れられた、まさにその音だつた。  
うねうねと当てもなく中で彷徨ついていた大量のチュー<sup>ウコメ</sup>ブが  
千代の体を支配しようと蠢<sup>ウコメ</sup>き、吸盤のようにひつつく。

口には酸素マスクのようなものが宛がわれた。

「さあ・・・僕のために・・・その神秘なる力を・・・全て頂戴・・・」

## 第四十一話・手を伸ばして

大きな廊下に、歩く音だけが響いた。

「「ヒーチデス」

ここここいと、リーメイが手招きする。  
そこは大きな書院造の部屋だつた。

「ひるーい・・・」

咲がおもわず声を漏らす。

その瞬間、ふと口の上に手が置かれた。

「！？」

「しつ！ 静力！」

リーメイが咲の口の上に手を置いたまま、辺りを見回す。  
気を集中させると、視線を感じた。

「・・・五体・・・」

ひゅん。

風が通り過ぎる音が、咲の耳にいち早く届いた。

金属音を立てて、日本刀が鞘から抜刀される。

そして・・・

「ふいいー」

リーメイのおかしな声が聞こえたかと思うと  
視線を感じさせていた妖たちは、ただの肉の塊カタマリになつていた。

「よし！ だいじょぶデス！ ケガないデス力？」

にこりとわらつて、振り向く。

日本刀はもう鞘の中にその身を潜め、リーメイの中華風の服には似合わないが

腰の横に差し込まれていた。

「は・・・はええ・・・」

神業といつていいかもしない。

その力は凄かつた。スピードなんか田で追えないくらい速い。

「さ、行きましょう！」

リーメイが、その細い指を、暗証番号を打ち込むキーボードに向けられた。

その頃、結界が解除できた五大神たちは・・・

自分の守護を引きつれ、皆々単独行動を行っていた。

柊たちは幸い会わなかつたが、この地下にもたくさんの魑魅魍魎チメイモウリョウがいる。

大方雑魚だが、それを狩つていた。

「庵様・・・。此処、少し変です・・・。まるで我々を嫌悪している  
みたいな空気が・・・」

胸を押さえて、秦が訴える。

そんな秦の言葉に耳も貸さず、庵は自分の掌から技を発動させていた。

大量の水が、標的を飲み込み悲鳴を上げさせる。

「庵様・・・？」

「黙つていろ、秦。我々を嫌悪するのは当たり前だろ?」

秦が言葉をなくして、黙り込む。

その肩に、何かを感じた。

それは庵の技の擬人化、オアだった。

水のように冷たい手はなぜか温かく感じる。

『我々は冥堂を嫌悪する。だから、冥堂も我々を嫌悪するのです』

「・・・」

かたかたかた・・・

「まだなの？」

麻貴の声。

「もーちょっとーほら開きましたーやつぱり七七一四五零六三八八

三四であつてた！」

凄い数の数字を、リーメイはぺらつと言つてのけた。

襖とは思えない金属音で、扉が開く。

リーメイが飛びよつに走り出した。

その後を四人が続く。

「此処を三十六回抜けたら、冥堂の実験室につくんデス。そこに、きっとあなた達の仲間サンはいるはずデスッ！」

もう少し、手を伸ばしてみなきや。取り戻すためには。

## 第四十一話・対決

「いじめじだるつ

真つ暗だ

何も無い

怖い

自分はどうなつてしまふのだろう

「ごぼ・・ごぼ・・

水の中で息をするような音だけが、広い空間に響く。  
ホルマリン漬けにされている、まだ死んではない少女。  
ぽちゃぽちゃ音を立てて落ちるホルマリン液に、深く漬けられていた。

その様子を見て、喉の奥から低い声を出して笑う男。  
男の傍にいる少女も、小さな口をにたりと吊り上げた。  
部屋には、赤い点がたくさんついていた。

そして、少女と男にも。

屍が数多く転がり、腐敗臭を放つ中

少女と男は、ホルマリン液の中にいる少女だけを、静かに見ていた。

がたん。

静寂が、打ち破られた。

少女が五月蠅そうに目を向ける。

椅子が傾き、地に転がっている先に、白い服を着た男がいた。  
腹からほどくほどくと赤黒い血が流れる。

「お・・・まえら・・ッ・・・」

何かを言おうと必死で口を開ける。

しかしその口から出てきたのは言葉ではなく、大量の血だった。

「がはあああ・・・・・」

「五月蠅いわね。死に損ないのくせに」

くいくいと、少女が指を動かす。

何時の間にか、男の後ろには少女の愛用の傀儡がすらりと肩をそろえて並んでいた。

しゅ。何かを示すように指を動かした。

瞬間、男は切り裂きジャックに裂かれたように、死んだ。

「そこまでだ！……！」

ばたん！！

大きな音がして、鉄扉が開く。

そこに立っていたのは、五人の人間。

「・・次から次へと、鬱陶しいわね」

部屋の真ん中に立っていた少女・小夜・が、目を細めた。視線の先にあるのは、リーメイ。

「あんた、そつち側についたんだ？」

「もともとアンタの所にいる気はないネ」

リーメイは日本刀を手に取る。傀儡用に縫い付けられていた針の痕がズキリと痛む。

バックアップするように、咲と麻貴が、リーメイに付いた。

柊と音魁は黙つたまま、小夜を睨む。

「死んで頂戴！」

「こっちの台詞だ！」

二人は同時に手を伸ばし、互いを捕らえた。

ぐぐぐ・・と、わなわな震えながら攻撃を繰り出そうとする。

先に手を出したのは、小夜だった。

傀儡は指が空いていれば使える。

右手の親指と、左手の薬指を、同時に裂くようにひいた。

がしゃがしゃと傀儡音がしてリーメイの背後に傀儡が回る。

とたんに、背中が裂かれた。

「あぐう・・！」

「リーメイさん！」

急いで傀儡を壊すが、リーメイに付いた傷は深かつた。

「バカね。その辺の奴らと一緒にしないで」

「バカはお前ダ！墮ちた姫！」

リーメイが、自分の刀を抜刀した。

小夜と距離をとる。

そして

「集まれ集まれ、雲の如く。離れ離れ、雨の如く」

その日本刀を、天に突き上げた。

日本刀の周りに、白い気が集まり、離れるように解けた。

「覚悟し口！」

リーメイの日本刀が、小夜の胸を貫いた。

## 第四十二話・ショータイム

「そ・・んな・・・」

深々と胸を刺された小夜は、その場に崩れ落ちるように倒れた。引き抜いた日本刀には、べつたりと赤い血が絡み付いていた。笛のような、ひゅうひゅうという音が、小夜の喉から出される。

「勝負あつたナ」

「ふ・・・ふざけたこと言つてんじゃないわよ・・・」

まだ指は動く。傀儡の代わりだつて何体もある。

この命と引き換えに、この女を殺すことだって・・・

「!?

突然胸が苦しくなつた。

何かが染み渡つてくる。これは・・・

「そう、毒ダ」

冷たく言い放つたリーメイを、小夜は睨みつけた。

「迂闊だつたナ。あたいはイツモ、この刀ニ多量の毒ヲぬつてアル」  
悠々と話しているリーメイの隙を窺い、小夜はぱつと指を動かした。  
後ろで待機していた人間傀儡が、音も立てずに忍び寄る。

が、それはただの悪あがきにしかならなかつた。

目にも止まらぬ速さで、リーメイは傀儡を壊したからだ。

「な・・!?

「あたいの生前をお忘れカイ? 人身売買のマフィアを一度に殺した  
狩猟サ!」

もうきつと助かるすべは無い。

なら、最後の悪あがきでもいい。きつとあなたは助けてくれるはず。

「みょ・・ど・・さま・・・」

震える手で、小夜は冥堂に向かつて手を伸ばした。

「「」め・・なさい・・・お役に・・たてな・・て・・・」

冥堂は静かにそれを見下ろした。

自分のために傷ついた少女。

それでも、

助ける気は

無い。

「キミはもう要らない」

「え・・・・・」

小夜の最後の言葉は、それだった。

その場にがくりと倒れ込み、息を引き取った。

「キミはやつぱり、籠の中にいるほうが、お似合いだ・・・」

「てめええええええ――――――ツ――」

その瞬間、柊の怒りが爆発した。

もの凄いスピードで、冥堂に襲い掛かる。

「ふやけんな！仲間じゃねえのかよ！？」

凄い剣幕で怒鳴りつける。

それでも冥堂はびくともしない。

しないどころか、冷たい視線を柊に向ける。

「キミのこと結構楽しみにしてたのに、結局それか・・・。ヒーロー気取るのはやめてくれないかな。いつもそんな言葉ばっかり。人間って無能だね。

あの子は仲間と思っていたらうけど、僕はなんとも思っていない。

死にそこないは、ただの「ミリ。助ける必要があるかい？」それに、キミ達からしても、あの子は敵だった。何故助けるなんていえるのか、僕には分からなーいよ」

冥堂の心無い言葉が柊に降りかかる。

そして

気づかぬうちに、柊は風圧かなにかで飛ばされていた。

「あぐー！」

壁にぶつかる。

「柊ーー！」

「キミ」と僕のショータイムの始まりだ。観客が少ないのが、残念だね・・・

## 第四十四部・危機！！

風圧で飛ばされた柊は、それで氣を失った。

「柊！ 柊い！」

起きない柊を、咲が揺さぶる。  
ぴくりともしない。

「ふざけんじやないわよ！」「  
ぱん！」

咲の平手打ちが、柊に直撃した。  
ぱんぱんぱん！！

「咲ちや・・・」

「黙つてな！ 麻貴ツ！」

後ろで咲の往復ビンタが続く中、  
音魁とリーメイは、冥堂をふさごでいた。

「お前は俺が殺す

「此処からはいかせまセン！」

自分の持っていた扇子を、据えた田で冥堂に向ける。  
冥堂が薄く笑つた。

挑発と分かつていたが、今の音魁は頭に血が上つていたため、  
ぱっと扇子を開いた。

そしてもう一度閉じ、冥堂に向かつて走り出した。  
リーメイが今度はバックアップに回る。

「うおおおおおおおおおおおお！」

閉じた扇子をまた開き、縦横に振つた。  
音の刃が飛び出す。

「一の舞！ 音刃！！！」

ただ標的を捉え、まっすぐにそれは飛び立つた。  
金色に煌き、冥堂の腹にぐさりと刺さつた。

冥堂の口から多量の血が吐き出される。

それを狙つて、リーメイも冥堂の腹に日本刀を押し込めた。

しかし

「え・・・？？」

悲鳴も上げなければ、苦しそうな表情もしない。

苦しそうな表情どころか、にたりと笑い始めた。

「ふふふ・・あははははは！こんなものか！キミ達の力は！・」

体を弓なりに反らして笑い始める。

そのおかしな現状に、音魁もリーメイも手が出せない。

「みそこなつた」

体に痛みが走った。

鈍い痛み。

ずきずきと頭と脇腹が痛む。

「地獄」

地がゆがんだ。

ゆがみ、大きな手が現れ、一人を捕らえた。

「うぐうう・・」

「あああ・・・」

爪でがりがりと引っかき、苦しみもがく。

「さよなら。キミ達はいらない」

どがあああああ！――！

地からはえた手が真っ二つに割れた。

「――？」

呼吸困難で一人は崩れ落ちた。

「はあ・・・はあ・・・！」

一人が顔を上げると、そこには

手を軸に、苦しそうに呼吸をする柊だった。

「ひいら・・ぎ」

「柊サン・・・」

「俺の仲間を傷つけた罪は重いぜ！クソヤロー！」

## 第四十五話・幼女 少女

冥堂の顔が歪んだ。

「ワザと？」

柊の顔も一緒に歪んだ。

「あ？ ビーサーことだ？」

「僕がやつこいつ言葉、嫌いなの知つてて言つてんの・・・？」

一瞬言つている意味が分からなかつたが、  
よつやく理解して、掌にぽんと拳を置いたのも、つかの間。

「水獄」

冥堂が叫ぶ。

柊の手に、腕に、みるみるうちに水が巻きつき、飲み込んだ。  
水の牢獄が完成している。

「どど・・・どひしてえ！？ 水つて・・・庵の技じゃないの！？」

麻貴が目を丸くして叫ぶ。

繰り出そうとしたチーンリングを手で握り踏みとじまる。

「僕は土・水・火・風・光。すべての技を使えるのさ」

種を明かした冥堂の言葉に、咲が後ずさる。

しかし後ずさりなんかしても仕方ない。

「五月蠅いわねッ・・・！ 柊を離しなさいよおー！」

神の矛先が乱れ飛ぶ。

それはひとつも冥堂にあたらないし、かすりもしない。

「がほおお・・・」

息が出来ない。

息が・・・。

苦しい

はつと顔を上げた。

そこに映つたのは、ホルマリンの中にいる千代だつた。若干身長が伸びたように見えるが、それは今関係ない。千代は自分よりずっと長く息の出来ない空間にいる。それを助けてやるために来たのだ。

こんなとこで

「こんなとこで死ねるかあああああ——！」

水の中でいるのであまり綺麗に聴こえなかつたが、咲と麻貴、音魁とリーメイには終の気持ちが伝わつた。

くそ・・・いけえええ！」

音刃が、音魁の扇子から飛び出した。

「なに!?」

「ふあ・・・ありがとう音魁い！」

水で濡れた着物は、ずるりと重くなつていた。

だが、動くには問題ない。

覺悟しやがれええええ——！

風力機械選定ノ

氣持ちとしもに。

相殺されたその気持ちは、それくらいで緩むものではない。

「相打ち・・！」

空中で半回転し、ふたりは着地した。

「文獻」

炎獄！

「五十嵐！」

水蒸気と、火の粉と、風に舞つてあたりに散る。

「おーりあああー！」

ひゅん。

一発の風が冥堂の頬を掠つた。

「・・・・・」

赤い液体がぽたりと落ちる。

「相打ち・・・？これで・・・ふざけるなよ・・・。お前如きが僕にかなうわけない！――！」

「じほお・・・・・。

柊の耳に空氣と水が混じった音が聞こえた。

「え？」

「じほーじほーじほー……

びきびきびき！――

「なあ！――？」

千代の体が、みるみるうちに大きくなつていいく。

そして最後には、チューブがぶつりと離れてしまった。

「ウソ・・・

それは、しいていうなら十七歳の少女だった。  
幼女なんかじゃない、立派な少女。

「・・・面白いい・・・」

冥堂の言葉に、柊はもう一度大きく、拳を握り締めた。

## 第四十六部・最後

この世は自分のためにある。

そう考えたつて、悪くは無いと思つよ。

だって、力がモノを言つんだから。

「面白い」・・・だとお？」

「うん。面白いじゃない」

にたりと、晒オモチャつた。

「この、玩具」

その言葉に、柊は頭にかつと血が上り構えもせずに走り出した。

「考え無しに突っ込んだダメデス！」

案の定、柊は冥堂の羽織がはためき飛ばされ、それをリーメイがぱしつと受け止めた。

「落ち着くネ！」

「ひるつせえ——千代の事を・・・玩具つて言つたんだぞ！？」

「気持ちは分かりマスツ！デモ落ち着いて！」

ばたばたと暴れる柊は、その細いリーメイの腕からするりと抜け出した。

抜け出したが、何かに蹴躡ケツマズいて転んだ。

「わた！？」

ちゃりちゃりと金属音がする。

鎖・・・いや、それはチエーンだった。

龍が彫られてある、チエーンだった。

「てめ！麻貴なにしゃがんだあ！バカ！」

「バカは柊くんだー！」

いつもにこにこしてて、何を言つても怒らない麻貴が、本気で怒っている様を見て、柊はおろか咲も音魁も驚いた。

「まき・・・」

「バカアーッ！そんなんで千代ちゃん助けられないよー。」

「柊くん・・・覚悟が弱いんだ！だからあんな挑発にキレちゃうんだ！」

柊の胸を、麻貴が力いっぱい叩く。

目からは、ぽろぽろと涙がこぼれる。

覚悟が弱い。

確かにそうかもしれない。

もうちよつとなのに、自分は何してんだ。

「そ・・・だな」

はつと顔を上げる麻貴。

まだ涙は流れ落ちている。

「悪かった。麻貴・・・。俺、今度は絶対ヘマしないから・・・」

麻貴の顔が、綻んだ。  
ホコロ

「絶対だよ・・・約束だよ・・・破つたら・・・もう一回叩くから

ね・・！」

「ああ！約束だ！」

「与太話は終わったかい？まあそれがきみの鎮魂歌レクイエムなんだけどね。もう少ししゃくり話をさせてあげようか？」

ぼきぼきと指をならして歩いてくる柊。

「れぐいえむ？なんだそりや。ああ、鎮魂歌つて書くやつね？あつてる？」

俺国語結構得意だから、自信あるんだよねー」「かーっと笑う。

おちやらけているのだが、まわりを取り巻く不陰気が  
強く強い。鋼のよう。

「うん。合ってるよ、よかつたね。これがキミの最終問題だからね

「口ッと笑つ。

が、その瞬間ぱつと消えた。

柊の後ろに回つゝむ。

「さよなら

「風結界！」

柊の周りに、風の結界ができる。

かきーんと弾ける音がして、冥堂の光の剣が壊れた。

冥堂の頬から血が流れる。それをぺろりと舐める。

「最後最後つてうるせーな。じゃ、それがテーマの最後の晩餐だよ。

冥堂！」

## 第四十七話・激戦

滴る赤い霧は、音も立てずに飲み込まれた。

常人からみて少し色が薄い舌で、冥堂は滴る血を舐め取った。

「晩餐ねえ・・・」

優しく、黒く微笑む。

「キミは残念だね。きっと昨日食べたものが晩餐だよ。味わって食べたかい?」

「ざーんねん!俺は味わって食べるタイプじゃないんでね」

二人同時に動いた。

早くて、目で捉えられないくらい。

冥堂の剣は光となり、また現れた。

風結界を造っている暇は無い。賭けで行こう。一か八か。

「このさい凛でいいや・・・。神様――!俺に力を――!」

柊も、カザツルギ風の剣を創り出した。

「風劍!!」

一瞬、自分は死んだのかと思った。

だつておかしいもん。なんで・・・なんで・・・

「なんで狐が出てきてんだあアアア!?」

わらわらと白い物体が。

それは紛れもなく、狐だった。

柊を一警してからすべての狐が、冥堂に食らいつく。

「ひいらぎー!今のうちに風剣の強度をあげちゃいなさい!」

聞き覚えのある声が。

ちよつとびっくりして振り向く。

「り・・・凜。と、その他の神々・・・」

「その他言つな!」

怒声が返ってきた。

「今はそんな事言つてらんない！私達も援護するから『氣を集中させ

て！そうすれば強度があがるから！」

凛がぴつと人差し指を冥堂に向けた。

目がきらーんと光り輝く。

「いけー！」

「リーダー気取つてんじゃねえー！」

湾が喚いた。

そして凛に治癒を命令し、自分は玉碎覚悟で突っ込んで、言った。

「冥堂！此処で憾みはらしてやうあ！」

柊の隣を、庵がするりと通り抜けていった。

まるで風が吹くように。まるで水が流れるように。

「お前に足りないもの・・・分かつた

「は？」

柊が間抜けな声をあげた。

そういうえばいつか言われたつけなーくらいの事を思つて、首をかしげた。

「集中力、だ」

学校でも家でもよく言われた。

お前は集中力がない、と。

反論するでもなく、ああたしかになあ・・・と思いにふけった。

「いいか、氣を固めるんだ。少しせいい。短時間で、より強度に。きつとこれはお前向きの力の上げ方だ。やってみる」

こくんと、柊は頷いた。

風剣を持っている手に、ぎゅっと力を込める。

「やってみる・・・！」

（つけ、力が入りすぎじや）

「え？」

紛れもなく、千代の声。

千代のいるホルマリンの大瓶を見ても、変わった様子は無い。

「千代ッ・・・！無事なのか！？」

(ちょっと苦しいが、大丈夫じゃ……。わしも手伝うから、とひ

とと強度をおこさない

力は入れすぎずに、抜きすぎず。

（よし・・・やるぞ！）

かねて、手にひくやつとねぬつとした、なんとも言えない感触が走

「ツ」

(我慢しない。気を込める)

また握りなおしをする。今度は何があつても離さない。

「冥堂」

「…………久しぶり。旧名で呼ぶのは止したほうが良いのかな？」

光と光がぶつかり合う。

水と炎と土と全てが冥界を標的に飛び出してくるその周りには守護たちがいて、処罰の用意を整えていた。

፩፻፲፭

全員の本

全員の体に悪寒が走った  
それとともに、強い気。

「つこれ・・・・。終か!?」

透明の気が、柊を優しく強く包んでいた。

「ひん」

ぱっと、冥堂がすり抜けるよつて出て行つた。

剣を構える。

「冥堂！」

一瞬の出来事に、追いつけない。

狐でも、神でも。

「死ねええええ！」

かつと、柊が目を見開いた。

「いけええええー————！」

立つたまま、二人は互いを刺した。

倒れもせず悲鳴も上げず苦しみもせず。

その時

どさ・・・

咲の顔が引きつり、震えた。

「ひいらぎいいいいい————！」

その数秒後、冥堂も・・・。

ばた・・・

互いに、地に臥せつた。

## 第四十八話・全てが終わりを告げる。

勝利の女神は、どちらに微笑む事も無い。

実力まかせで玉碎覚悟で……。

「やだあああああーーーいやあああーーー」

臥せつたままの二人。

叫び声が木霊する。

しゃきん・・・

鋭い剣の音がした。

煌々と輝く光の剣。間違いなく、立ち上がったのは冥堂だった。脇腹から赤い血がぽたぽた流れ落ちる。

あまりの光景に、五大神も麻貴たちも動けなかつた。

「・・・・・許さない・・・・」

らんらんと、目だけが大きく輝く。

獲物はもう戦う力を持つていない。

仕留めるなら、今。

「え・・・?」

かきん・・・

鈍い剣の音が、震えるように鳴り響いた。

わなわなと震える足で、剣を軸に立っているその華奢な体は、今にも折れそうだ。

胸から血が、あふれ出す。

止まる事を知らない血は、何処へ流れ出たいのか。

「ひ・・うぎく・・・」

かされた声は言葉にならない。

麻貴の、音魁の、咲の日に大粒の涙がたまつていく。

透明の雲は、落ちないように持ちこたえるだけで精一杯だった。

「しぶといね・・・」

「てめーこそ・・・」

柊は生きていた。

戦う力など残つてない、それでも立ち上がる。手を、握りつぶすように握つた。

なぜか鋭い痛みが走り、びくりと肩が揺れる。

「な・・・?」

しゃらん・・・

大きな赤い珠が揺れる。簪の、珠。

いつも千代が身に着けていた、千代の日にそっくりの、赤く大きな珠。

「俺に・・・貸してくれのか・・・」

蛍光灯から青白く降り注がれた光に反射し、それは鈍く素敵に光り輝いた。

「もうちょっとの辛抱な・・・千代ッ・・・」

風剣を地に投げ捨てた。

からんからーんと、乾いた音とともに風化していく。

「戦闘放棄・・・? 武器が無くなつたら戦えないよ  
俯いたまま、ピクリともしない柊。

それが、冥堂の理性を逆撫でする。

「何とかいいなよ・・・」

うんともすんとも言わない柊は、そのかわり顔を上げた。  
目に光が宿っている。

「やの田・・・眞にいらなー……」

獣が吠えたくつた。

光の剣は、もはや剣那にちりぬくものと化す。  
「感情ぶつこわれてんじやねーのかてめえええ———。」

ぐさあああーその簪を眞堂の胸につきたてた。

赤い鮮血が、あたりを汚した。彩つた。

宙にキラキラと舞い、ぱしゃぱしゃとえざつな音を立てて墜つた。

墮ちたのは、眞堂だつた。

「く・・・そ・・・つ・・・

倒れた眞堂は、みるみるつけて消えていく。

脆かつた。諸刃の剣。ガラスの体。

「せめて安らかに眠つてくれ・・・

暗闇はきつとなくなるだらけ。

空はきつと晴れるだらけ。

キリせめあつとい、僕らの元へ歸つてくねまうだ。

全てが終わりを告げる。

ぱりーんといづガラス音と、ぱしゃぱしゃと流れる緑の液体が  
終わりを、強く告げた。

「や・・・つたの・・・?」

その液体に身を任せ、少女の姿に変わった千代が、流れ出でくる。柊よりちょっと大きいくらいの背。

凛が、それを受け止めた。

長い髪は、滴る雫で煌々と激しく煌いた。

「・・・」

目のやりどりに困る柊たか。

幼女でも直視できない体なのに、成長したその体を見れるわけが無い。

「なに固まつてんの・・・帰るわよ」

すっぽりと、顔に狐の面を被せた凛が、顎をしゃくって出口を示した。

そこには結界が解けて中に入り込んでいた銘銘が。

「銘銘！」

『無事だつたようだな。すぐに雷雲布を用意するから待つていろ』

「あ・・あの・・あたいどうスレバ・・？」

仮面の下からでも分かる優しい微笑を、凛はリーメイに向けた。

「あたしが引き取つてあげる。一緒においで」

ぱあああっと、歡喜に包まれたリーメイはうれし泣きなのか頬に涙を伝わせた。

何度も何度も、しきりに頷く。

すべての終わりを告げたのは、死ねない少女。

## 第四十九話・さよならー

風はさらさらと流れた。

雲はゆらゆらと流れた。

僕らの旅は、炎が消えるように終わった。

さよなら

雷雲布は意外に心地よかつた。

蔭と咲に怪我の手当をしてもらつたあと、咲に散々怒られた。お前は後先を考えなさすぎだとか、私がどれだけ心配したか分かっているのかだとか。

でもそれは、本当の本当に心の奥底から咲が自分を心配していくれたのだから

なにも文句は言えず、俺は苦笑いするしかなかつた。

麻貴は凄い剣幕で俺をしかつてくれた。

今でも感謝してる。ありがとうつていつたら、どうしたの? 頭打つた? なんて言つてきた。

音魁は何も言わなかつた。そのかわり笑つた。

顔についた傷。あいつは隠さずに曝け出していた。やつぱりあいつは強い。

ころりと寝転がつた時、庵が何かを持っているのに気がついた。

「庵、なんだそれ?」

緑色の液体に、瓶。見覚えがある。

そしてその中には・・・・田玉がひとつ。

「なななな何でそんなもん持つてんだよー?」

「これか・・・これはあいつの左目だ。あの部分だけ髪で覆つていただろう。

この田玉に禁術が押し込まれていたんだ。だから俺が持つて帰つて成仏させる」

柊は、この人は心底おかしな人だ、と思つた。

ふつと見上げた庵の顔は、悲しそうな、安堵のような顔だった。

「俺らが見捨てたんだ。あいつを。助けられなかつた」

「上手くいかないもんだな……」

柊は、千代を一警して頷いた。

その後千代はいつも田玉を覚まさなかつた。

「なあ、どうしてだよ？」

「黙つててよ。今あたしが治療してんだから。リーメイ。一番田の棚の錠剤取つて！」

此処に来てから、リーメイは忙しく働いた。

「ハイ！」

心なしか笑顔でいるときが多くなつた。

今は治療中なので笑顔でいるときつと凛に怒られるだらうけど。

「千代サン、目覚めませんネ……」

「大丈夫！あたしがいるんだもん！目を覚まさしてあげるわ」

寝具の上に寝かされた千代は、大きかつた。

もう立派な少女だ。背丈で言えば、蔭と同じくらい。綺麗で長く伸びていて、睫は、濡れているようにみえた。

その時に

「んう・・・・・？」

ふわりと、目が開いた。

大きくて紅い目が、顔を覗かせる。

「千代！」

「なんじゃ・・・柊か・・・。あれ、凛様？・・・お前は誰じや・・・？あれ？わし・・・？」

「助かつたんだよ千代ッ！」

しきりに腹の辺りを撫でる千代に、現状を教えてやる。  
ぽかんと呆けていたが、赤い目に透明の涙が溢れ出した。  
ぼたぼたと白いシーツに染みを作った。  
顔をくしゃくしゃにして、それを見られたくないのでシーツで隠す。  
嗚咽を漏らしながら、千代は泣いた。

「さて、柊たちも元の世界に帰んなきやね」

ぱんぱんと凛が手を叩く。するりと具象化した漣が現れた。  
無駄に長い髪は何処までも何処までも続いているようだったが  
顔は言葉では言い表せないくらいに美人だった。

『久しづりね。可愛い子猫ちゃん』

寒気が走るような喋り方は相変わらずだった。

「この子達を、元の世界まで連れて行つて」

「ちょっと待つて！私たち・・・帰つていいの？」

「もちろん」

凛の答えは意外にあっさりとしていた。

なんかあっさり捨てられた気分だ。

「ただし、用があるときはまた呼びに行くから、覚悟しといてっー」と、窓を開けた。

涼しい五月の風が、遠く海原から吹き抜ける。

「蒼く輝く漣よ！今風を我が身に宛がい風魔を呼び寄せろー」

空中に体が舞い上がり、そのまま地へと急降下していった。

「ぱいぱーーーい！」

凛が大きく手を振る。続いて湾と満と蘭と煩も。

当然の如くか、斬と庵と蔭と秦は手を振らなかつた。

リーメイが笑つてるのが見える。

そして、千代も・・・・・。

「わがつ！？」

どすん。

何処かに落ちた。

見たことのある風景、八神神社。

「帰ってきたんだ！ホントに！」

咲があたりを見回す。自分のデジタル時計を見て、首をかしげた。

「どーしたんだ？」

「私たちが天界へ行つた日の次の日になつて。日付が」

『ふふふ。天界は此処より時間が流れるのが早いのよ。気にしなくていいわ。

でも、私たちは実在しているの。いつかあなたたちに会いに来るからね。

その時はヨロシク！可愛い子猫ちゃんたちつ！』

『頼むからその呼び方やめろ！』

音魁が怒鳴つた。

漣はくすくす笑つて、具象化のまま空へと上がつていった。

「つじゅーか、どーするよ。この衣装・・・・・」

柊たちは、なんかおかしな民族衣装っぽいののままだつた。べつにそんなに大したことはないのだが、やっぱりコスプレに見え

るのだった。

## ヒュローグ・それは終わらない歌のよひ

家に帰ってきた柊はまず母にその服装を驚かれ、外泊したことに父にぶつぶつと文句を言われ、最後に姉になんか薄汚れている格好を見てけらけらと笑われた。

「おっはよー！」

遠くで手を振っている。

くせ毛でわかつた。あれはきっと麻貴だ。

そしてその横にいる長いみつあみの少女は・・・

「柊おそーい」

文庫本を手に溜息をつく咲だった。

きつちり編まれているその髪は、とても戦いで武器になつたとは思えない。

「おっす、柊ツー！」

上から声が聞こえる。

八神神社の鳥居の下に立つていたのは、音魁。巫女のようなんかなよく分からない服を着て、手にはお払い用のなにかしやらしやらした物を持っている。

「柏手、打つていけよ」

悪戯っぽく笑つた。

こくんと頷き、柊は駆け出した。

それに続いて麻貴が走り出す。咲は呆れたように笑つて、自分も石段に足をかけた。

そこは何も変わらなかつた。

いつか、千代がふてぶてしくすわつていた境内の一部がぽかんと穴が開いたように寂しい。

「帰ってきたんだねー」

麻貴が高い高い空をうつとりとした眼差しで見上げる。何も見えないけど、何かがいる、そんな感じがした。

「大変だつたね」

咲が薄い半そでのカツターシャツの袖を捲る。大きく裂けた傷跡。長めのスカートを捲ると、そこには縦に肉が抉れたあとが。

麻貴がひつと短く悲鳴を上げた。

「い・・・痛そうだね。咲ちゃん・・・」

「これくらいなら大丈夫よ。心配ないわ」

ぽん、と麻貴のくせ毛に手を置いた。

安心したように、麻貴がにつこりと、それはまるで一足早い夏の向

日葵のような顔で笑つた。

咲の顔がぱつと赤くなる。

「また、逢えるかな」

「迎えに来るつて、言つてたぞ」

「そのうち来るんじゃないから?」

「そーだね! また逢いたいねッ!」

「そーかそーか、それはよかつた」

聞き覚えがあるが、きっと多分絶対此處では耳にするはずのない声。ソプラノかアルトかつて言えばアルトの、低いけど特長のある澄み切つた素敵な声。

振り返ると

「千代!」

「しかも何! その格好は!」

千代は、咲とともによく似ている格好をしていた。

背が伸びたので、違和感はない。

そして千代の後ろには

「今日はデス。みなサン!」

またもや咲とよく似ている姿をした、リーメイがいた。

お団子頭と、日本刀は顯在していたが、こんな田舎町でそんな物騒なものを持ち歩いていたら即逮捕されるはずだ。

「リーメイも？どうしたの？」

「いや、ちょっと散歩がてら様子を見に来た」

「昨日の今日で？凛はちゃんと仕事してんのかよ」

「隠に見張りせてある。きっと大丈夫だ」

ふんと鼻を鳴らした。ふてぶてしい態度は変わっていない。

「もうじや、散歩がてら来たついでにこれを預かってきたんじゃ」  
かさかさと紙が擦れる音がして、一つの紙切れが手渡された。  
習字紙に墨でテキトーに書いてあるかなりのアバウトさ。  
それはぽんと煙を上げて、電話にはや代わりした。  
耳をあててみる。

『あーもしもし柊イ？あのわあ、一段落ついたとこ悪いんだけどおー

ちょつとセー、氏神サン虐殺事件が相次いでんのねえー。

犯人も検討ついてるし、あたしも忙しいし、（つてゆーがあたしに  
来た仕事なんだけど）

ちょちよいのちょいと始末つけといくんない？』

堪忍袋の緒が切れたのははじめてだ。

「ふつざけんじゃねええーーー！俺らはオマーの道具じゃねーん  
だ！」

『守護じゃん。道具でもなんでもいいから早く来なさいよ

「ヤダ！あんな自殺行為みすみすやれるかーーー！」

『やるやらないは勝手だけど、あんまり騒ぐと・・・・・』

しゃあん。

柊の首に冷たい鉄が当たられた。

「つべこべ言わずにわっとやつてくだサイね」

にっこりと笑うリーメイの日本刀だった。

思わず冷や汗が出る。これは断るに断れない。

「は・・・はい・・・やります・・・やられていただきます・・・  
「ハイ、最初から言えぱいいん'テスよ。柊サン」

五月の風にのって、  
柊たちの戦には終わることを知らない歌のよう

どりまでもどりまでも、続いていくのだ。

## Hペローゲ・それは終わらない歌のよひ（後書き）

「水晶物語」シリーズ完結です！

長かったー。

終わってしまったけれど、感想・評価などはいつでも送ってください！とっても嬉しいですッ。

また次も懲りずにファンタジーを書こうと思います。ファンフィクションもまだまだ続ける気でいます。ではでは、こんなつたない文章を読んでくださった読者の皆様、今までどうもありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2329b/>

---

水晶物語

2010年10月9日18時48分発行